

609-23

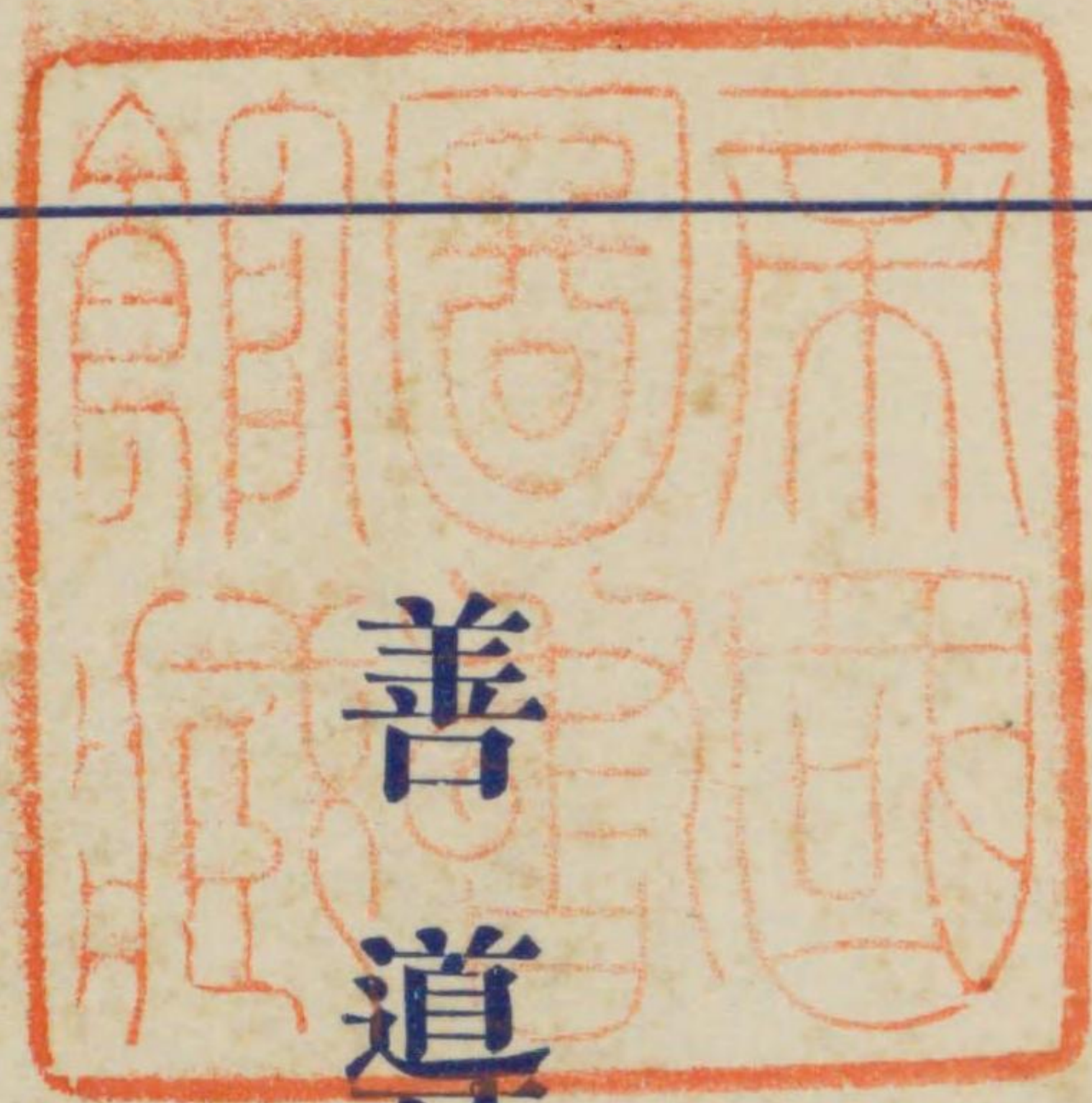


1200501533578

609
3



3 199

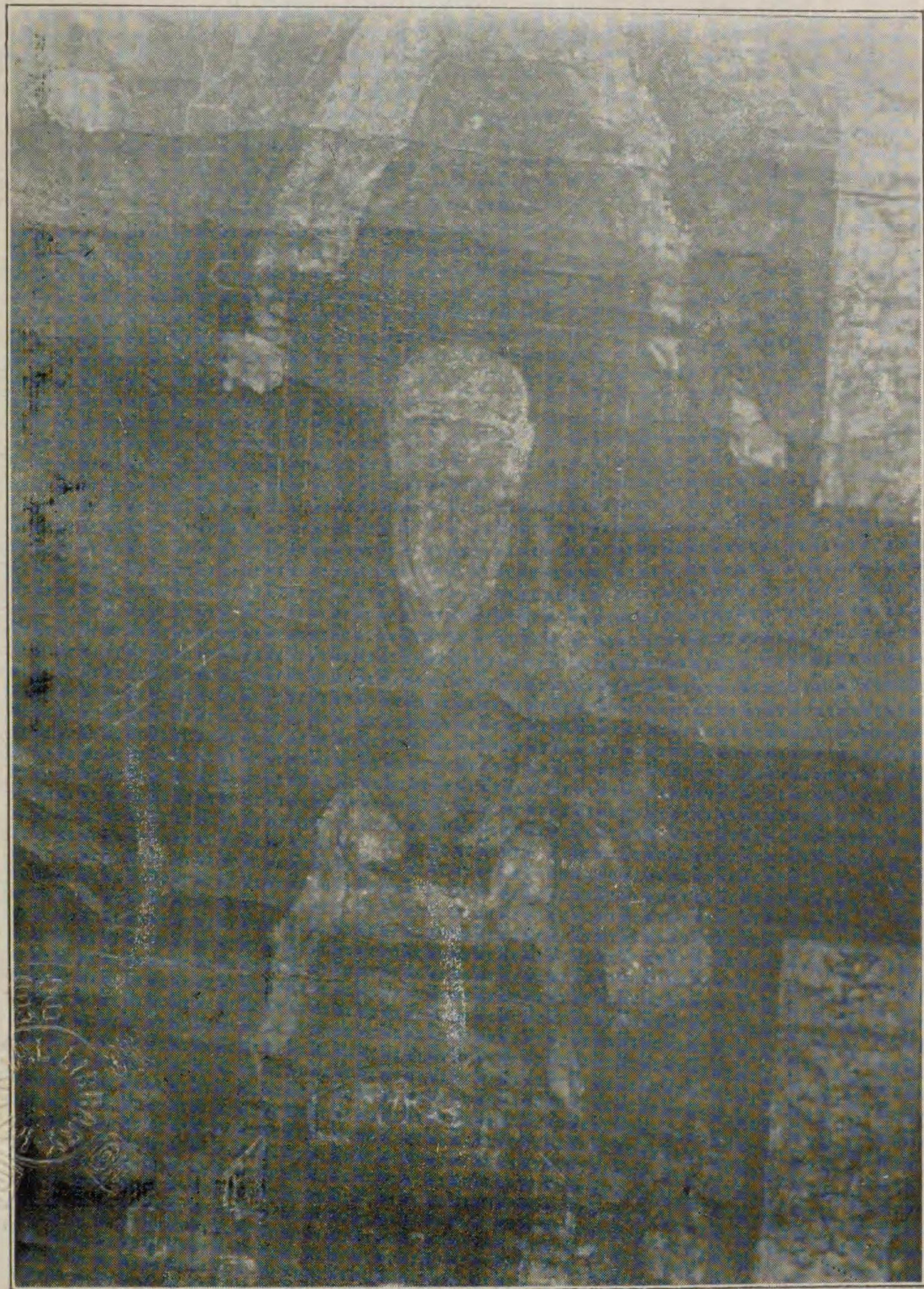


善導
大師
鑽
仰

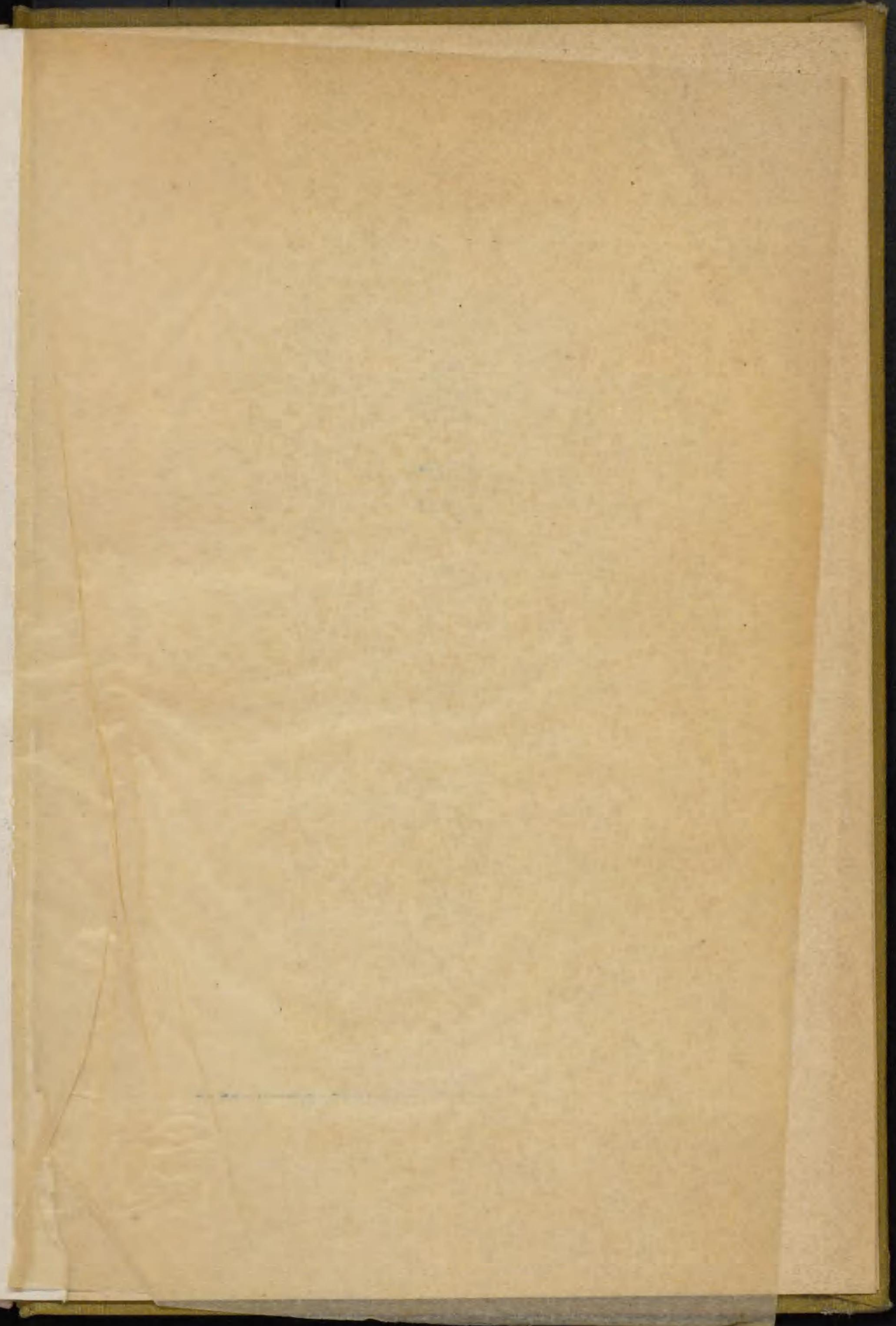




影御師大導善尊本契



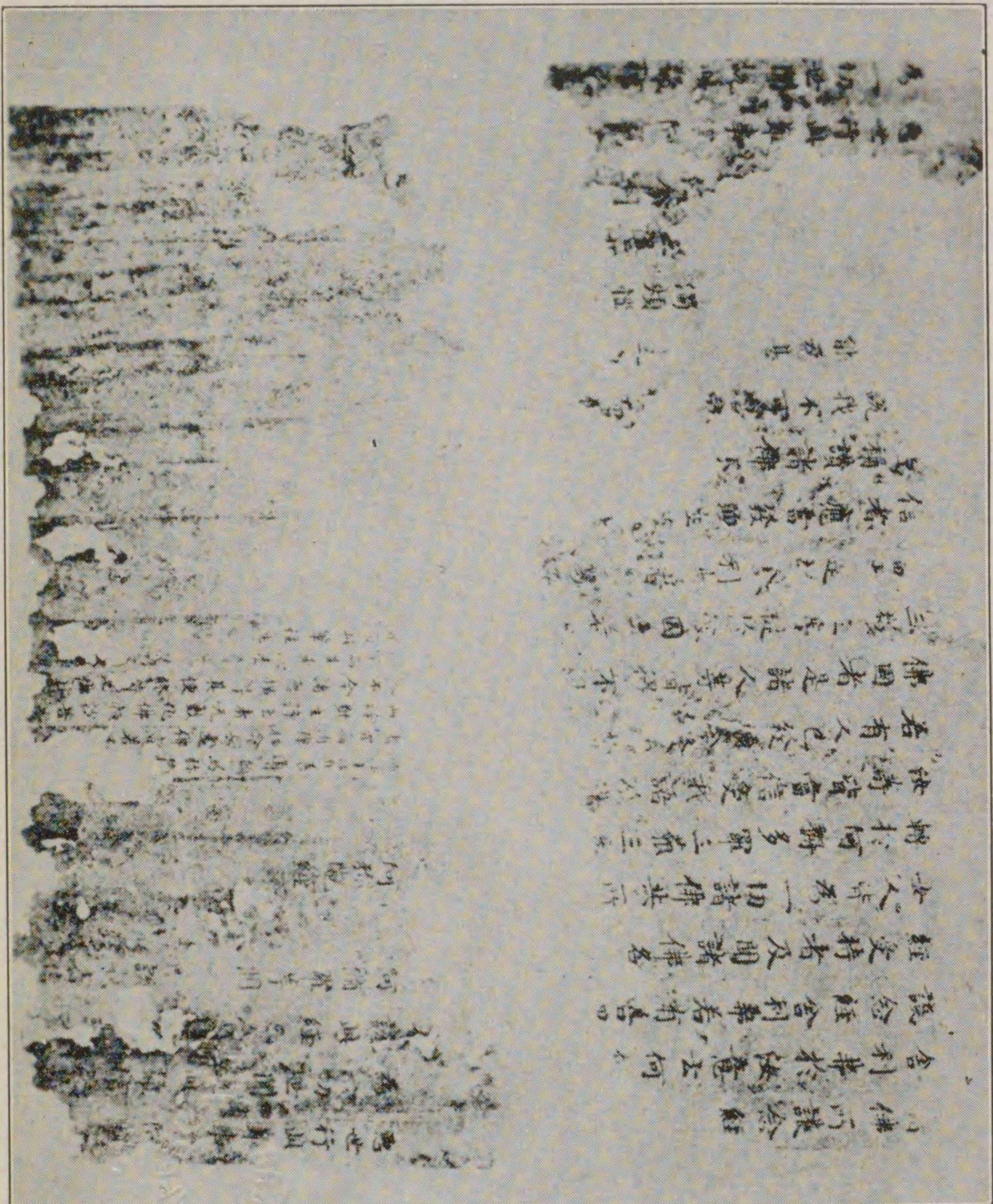
光明本尊善導大師御影





來如陀彌阿惟思劫五





阿彌陀經殘片及識語

佛門談論經

舍利弗於佛意云何

說念經舍利弗若有善

經受持者及聞諸佛名

女人皆為一切諸佛共所

讚於阿耨多羅三藐三

世希寶當信受救諸公

若有人已往無量阿僧

佛國者是諸人等皆得

三般二尊位於家園

四上之六引

信者應當依師

以攝諸佛

說我不

能若其

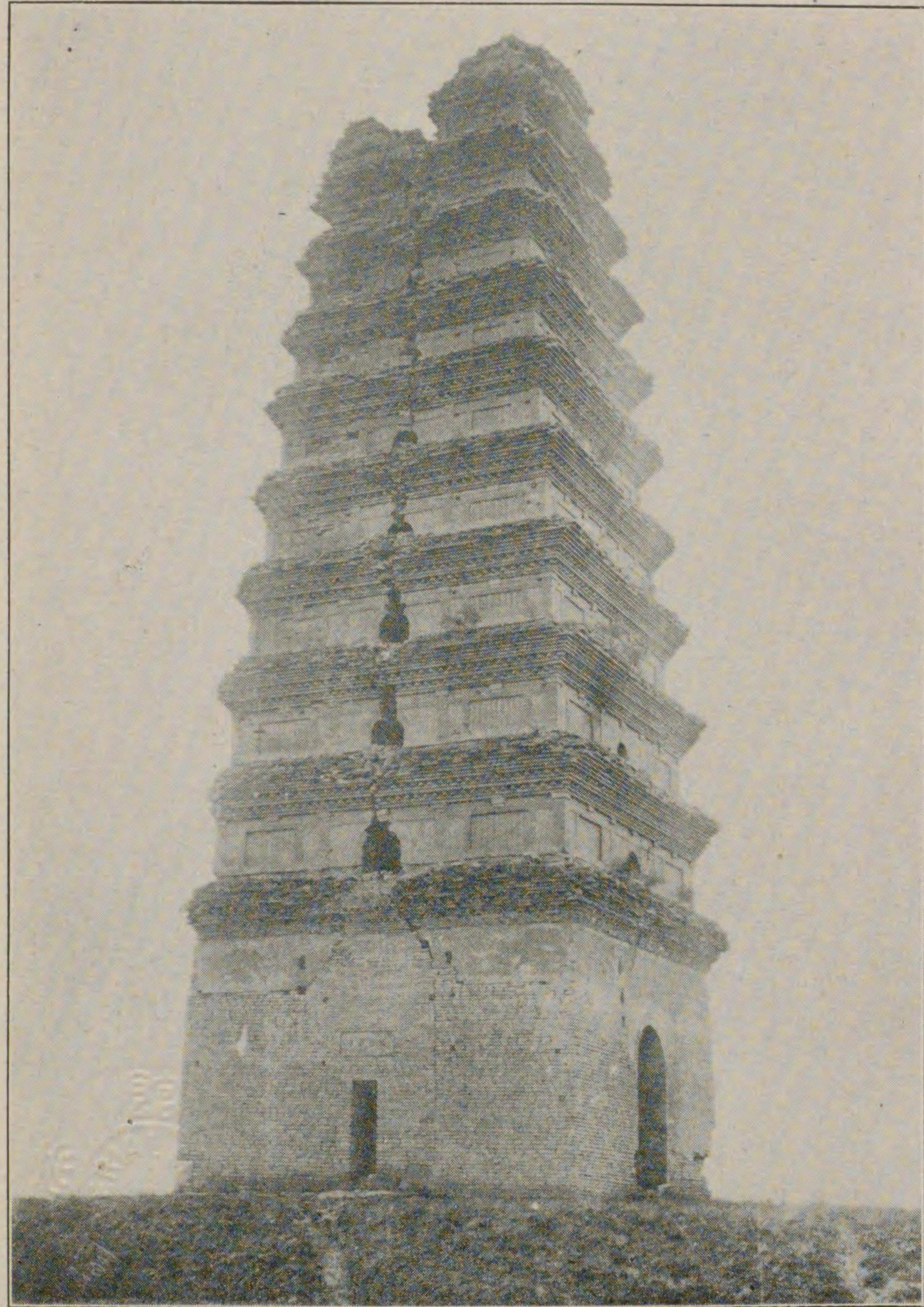
獨頌

之

之

之

之



香積寺大塔



作此念時東岸忽聞人勸聲仁者但決
定尋此道行心无九難若任即死又西岸
上有人喚言汝一心正念直來我能護
汝眾环梁隨於水火之難

愚者得親焉



二 河 白 道 圖

序 詞

淨土門の源流は遠く如來の慈教にありとするも、これを開顯し一般民衆の上に弘
宣し給ふた方は支那に在りては、先づ第一に指を善導大師に屈せねばなりませぬ。
支那には廬山流、慈愍流の念佛もありましたが、善導流の念佛が我國に最も深く影
響を持つて居るのであります。それは法然上人が偏に之に依り三百八十餘人の門弟
が之を承け、眞宗を初とし、西山・鎮西・九品・長樂寺等、幾多の流派があらはれ、何れ
も多くの影響を享けたからであります。善導大師御一生涯の行跡は、焰々たる炎の
如き信仰を以て築き上げられ、大宗教家としての面目躍如たるものがありました、
其信仰の感化が支那及び日本を風靡して、こゝに淨土門と云へる大宗教の王國が現
出したものであります。

大師の在世からは年期遠く隔たつて、今や一千二百五十歳を超えやうとして居り

609-23

ます。のみならず其生活して居られた地域からは數千里を隔て、居りますから、その面目を彷彿して之を忍ぶことも容易ではありません、況んやその偉大なる信仰を思念しつゝ、其真相を描くが如きことは、あまりに崇高なる行爲であつて、吾々の如き凡俗には到底出來得べからざることでもあります。

併し大師の偉大なる信仰を偲び、その行跡をたざれば、思慕止まざるものがあります。それは大師が「今日より始めて願はくは、法界の衆生と共に邪を捨て正に歸し、菩提心を發して、慈心を以て相向ひ、佛眼を以て相看て菩提まで眷屬とし、眞の善知識となりて、同じく阿彌陀佛國に生じ、乃ち成佛に至らん」と溢るゝが如き慈愛の心を以て私共を抱擁し、私共の同伴となり、先達となりて、私共が成佛するまでは、常につきまとうて下さるゝ所の、大師の至誠になつかしむからであります。

また大師は『觀無量壽經』の定善と云ふ思念的のことや、散善と云ふ道德的のこ

は畢竟、弘願念佛と云ふ眞實の宗教に入るの要門であると見られ、その宗教の信念を開顯するに二河白道の譬を以てせられたことは、私共の信仰生活に強き暗示を與へらるゝからであります。大師が二河譬に示された白道の歩みは過去に於ける譬喩ではなくて、現實生活の光明であらねばならぬのであります。信仰生活の狀態が正に斯くあるべきでありますのみならず、今日の思想界を顧れば、正に群賊惡獸が競ひ逼るのみならず、左傾と云ひ右傾と云ひ、何れにか偏したる思想は所謂水火の二河に異ならぬのであつて、近頃尖端を往くとか「頂角を往く」とかと云ふ言葉が頻りに用ひられますが、白道の歩々は即ち右傾左傾に捉はれずして所謂「尖端を往く」の歩みであります。すれば白道の歩々は私共は云ふ迄もなく、國家社會の萬人が共に進むべきの道であらねばならぬのであります。

古來から善導大師の徳を歎美し、また其行跡を傳へた方は少くはないのであります。私共にはどうも霞を隔て、遠山を眺めるが如き感じがしてならぬのであ

ります。善導大師の眞面目は果して、かゝるものであつたかと疑はるゝ點がないでもありません。畢竟これは偉人にあらずば偉人を描くことが出来ない證據なのであります。

こゝに我が宗祖親鸞聖人は業に已に偉大なる信仰の上より「善導獨り佛の正意を明かにす」と歎美したまひ、また「彌陀の本願まことにおはしまさば釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言たまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせ、そらごとならんや。法然のおほせ、まことならば親鸞がまをすむね、またもて、むなしかるべからずさふらふ歎」と仰せられて、佛祖的傳の心事が相通するの旨を明かされてあります。私共は宗祖親鸞聖人の信仰眼に映じた善導大師を拜ませて戴き、その眞相を得たるものとして深いなつかしきを持つものであります。それ故に私は親鸞聖人が信仰眼に宿つた善導大師の行化教化の迹をたどりて、安らかに大師の懐に寝ねつゝ願力の白道をすゝみた

いと念願して止まない次第であります。只想到らず筆拙くして、その萬分の一を描き得ざるを憾みとするのみであります。

昭和五年三月二十七日

千二百五十回の諱辰に當り

遺弟 濱口 惠璋 敬白

例言

一、本書は善導大師の道迹及び其教化の梗概を知り、その高德を鑽仰せんが爲めに編纂したり。大師の偉徳を奉讃し願力顯示の宗風を宣揚することは吾等遺弟の齊しく念願する所なり。

一、本書の編纂は草卒の間に筆を下せしを以て、未だ意に満たざる所多きも訂正はこれを他日に譲ることせり。

一、冠頭にかゝげたる善導大師御影は紀伊安樂寺に藏する光明本尊中に畫かれたもの。東大寺勸學院所藏の國寶五劫思惟阿彌陀如來は善導大師の作と稱せらるゝものにて、その撮影は二月堂觀音院稻垣晋清師の斡旋による。其他燉煌發掘の阿彌陀經及び識語は大師の筆蹟の地上に存する唯一のもの。又香積寺大博塔は大師の墳墓地を偲ぶべし。二尊遺喚文は坂東本『教行信證』より複寫せり。眞溪氏の二河白道圖また數百年前のものたり。本書出版に就ては興教書院精一郎清水君を初め其他顯に冥に祐助せられたる方々の芳志を感謝す。

目次

序 詞

例言

光明本尊 善導大師御影
五劫思惟阿彌陀如來
阿彌陀經殘片及識語
香積寺大博塔
親鸞聖人二尊遺喚文
二河白道圖

紀伊 廣村安樂寺藏
奈良 東大寺勸學院藏
京都 大谷光瑞師藏
支那 陝西省長安縣
東京 報恩寺坂東本
京都 眞溪涙骨氏藏

第一編 大師の道迹

一 大師の前半生……………一頁
二 西河の往訪……………五頁

目次

七

三 長安の教化……………一二頁

四 平素と終焉……………二二頁

五 滅後の大師……………三七頁

第二編 大師の著作……………四五頁

一 觀無量壽經疏……………四九頁

 支 義 分……………五〇頁

 序 分 義……………五六頁

 定 善 義……………六二頁

 散 善 義……………七六頁

二 法 事 讚……………九六頁

三 觀 念 法 門……………一〇六頁

四 往 生 禮 讚 偈……………一二〇頁

五 般 舟 讚……………一二九頁

 五部九卷の流傳……………一四二頁

六 其他の著作……………一四八頁

イ 彌陀經義……………一四八頁

ロ 念 佛 集……………一五一頁

ハ 大乘布薩法……………一五二頁

ニ 二十四讚……………一五三頁

ホ 一行禮文……………一五三頁

ヘ 臨終往生正念文……………一五三頁

ト 勸化徑路修行偈……………一五五頁

其 他

第三編 善導和讚……………一五七頁

一 聖者善導……………一六六頁

 一 善導の本地……………一六六頁

 二 垂迹の善導……………一六九頁

二 觀經の對機……………一七三頁

目 次

三	釋尊の施權……………	一七七頁
一	要門の開意……………	一七七頁
二	並修の雑修……………	一八〇頁
三	部類の雑修……………	一八二頁
四	雑行と雑修……………	一八七頁
四	廢立の意巧……………	一九〇頁
五	弘願の意義……………	一九三頁
一	凡夫の得證……………	一九三頁
二	願力増上縁……………	一九六頁
三	聖人の乗託……………	一九九頁
四	乗託の相……………	二〇一頁
六	二尊の遣喚……………	二〇三頁
七	白道の歩み……………	二〇八頁

一	真心と懺悔……………	二〇九頁
二	金剛の信心……………	二一二頁
三	三心の具不……………	二一五頁
四	正念の歩々……………	二一八頁
五	迷へるひと……………	二二二頁
八	西岸の寶國……………	二二四頁
九	東岸の群賊……………	二二六頁
一〇	二尊の恩徳……………	二三一頁
第四編	正信念佛偈・念佛正信偈・入出二門偈……………	二三七頁
一	正信偈と略文類……………	二四二頁
一	教……………	二四二頁
二	行……………	二四七頁
三	信……………	二五〇頁

四 證……………二五五頁

二 入出二門偈……………二五七頁

一 行……………二五七頁

二 教……………二五八頁

三 信……………二六〇頁

イ 極難の信……………二六〇頁

ロ 獲信の因縁……………二六一頁

ハ 信心の勝益……………二六三頁

四 證……………二六五頁

第五編 終南語錄……………二六七頁

開示悟入……………二六九頁

乘佛願力……………二六九頁

水に溺れたる人……………二六九頁

五 乘齊入……………二六九頁

洪鐘……………二七〇頁

水に畫けるが如し……………二七〇頁

苦海に流る……………二七〇頁

八 厭……………二七〇頁

隱顯機に隨ふ……………二七一頁

大無量壽經の説相……………二七一頁

佛光の益……………二七二頁

父母の恩……………二七二頁

佛恩に踰ゆ……………二七三頁

師 恩……………二七五頁

仁 慈……………二七五頁

苦 提 心……………二七六頁

苦樂因果……………二七六頁

經教は智慧を開く……………二七七頁

明鏡甘露……………二七七頁

法財を失ふ……………二七七頁

清 淨……………二七八頁

如來は口過を除く……………二七八頁

千里に踰ゆ……………二七八頁

六道に走らん……………二七八頁

猿猴の心……………二七八頁

歸 去 來……………二七九頁

眞の報佛恩……………二七九頁

宿 善……………二八〇頁

三 寶……………二八一頁

立 撮 卽 行……………二八一頁

衆生の心想中に入る……………二八二頁

是心作佛是心是佛……………二八二頁

佛の形像……………二八二頁

平等の大悲……………二八三頁

三界の苦樂……………二八三頁
 眞佛弟子……………二八三頁
 満足大悲の人……………二八三頁
 同體の大悲……………二八四頁
 有縁の法……………二八五頁
 口殺・身殺・心殺……………二八六頁
 最上勝妙の戒……………二八七頁
 六念……………二八七頁
 深く因果を信ず……………二八八頁
 疑謗を得ざれ……………二八八頁
 發菩提心……………二八九頁
 衆生の流轉……………二八九頁
 無明障重し……………二八九頁
 能化の慈濟……………二九〇頁

西方に往け……………二九〇頁
 西方を指授するの恩……………二九一頁
 弘誓多門……………二九二頁
 渴者の清泉を得たるが如し……………二九二頁
 還來穢國……………二九三頁
 別して西方を指す……………二九三頁
 彌陀を念せしむ……………二九三頁
 佛の慈悲を念せよ……………二九四頁
 諸佛の舌相を舒べ給ふは……………二九四頁
 甚難希有……………二九四頁
 隨宜方便……………二九五頁
 三界は火宅……………二九五頁
 いざいなん……………二九六頁
 法輪を轉せよ……………二九七頁

慇懃に喚ぶ……………二九七頁
 閻浮を憶ふ……………二九七頁
 心光常照……………二九八頁
 三念願力……………二九八頁
 願力の攝……………二九八頁
 證生増上縁……………二九八頁
 善性と悪性……………二九九頁
 無所畏……………三〇〇頁
 常に攝受し給へ……………三〇一頁
 要懺悔文……………三〇一頁
 三歸依……………三〇一頁
 發願文……………三〇二頁
 日沒無常偈……………三〇三頁
 報佛恩……………三〇三頁

略懺悔文……………三〇三頁
 眞容の影現……………三〇五頁
 眞身……………三〇六頁
 入觀文……………三〇六頁
 隨喜……………三〇七頁
 佛は師、法は母……………三〇七頁
 讚順の心……………三〇八頁
 三界六道……………三〇八頁
 涅槃國に入る……………三〇八頁
 衆生の爲なり……………三〇九頁
 利劍の名號……………三〇九頁
 眞門に入れ……………三〇九頁
 出づるに期なし……………三〇九頁
 不惜身命……………三一〇頁

第一編 大師の道迹

善導大師讃仰

一六

同行親近せよ……………三二〇頁

普く勸む……………三二一頁

浄土にて對面……………三二〇頁

佛恩を謝せよ……………三二二頁

手に空を把る……………三二一頁

跋 詞……………一頁

善導大師の詳しき行蹟を知り得べき史料は甚だ乏しいのでありますが、それでも西明寺道宣の『續高僧傳』を第一とし、其他文詔、少康共録の『往生西方瑞應刪傳』、道鏡・善道共録の『念佛鏡』や、宋遵式の『往生西方略傳』、宋清月の『往生淨土略傳』、宋戒珠の『淨土往生傳』、宋王古居士の『新修往生傳』等数々のものがあります。此等に載せられた大師の紀傳を綜合して、その行蹟の一斑を略叙しませう。

一 大師の前半生

善導大師は隋大業九年に呱呱の聲を擧げられました。そして其六十九年の生涯は支那文化史上の黄金時代とも云ふべき時期に際會して、初唐の華やかな文化の影響を受け入れられたことも鮮少であるまいと思はれますが、さりとて大師の如き宗教的天才は、唯外面に現はれた華やかな幻滅の文化には眩惑せられずして、内面に潜在せる人間性に直面して、或種の悲哀を感せられたことは否むことの出来ない事實

なのであります。

大師の出生地も姓氏も明かではありません。『瑞應刪傳』には「姓は朱、泗州（安徽省泗州府盱眙縣の北一里）の人なり」と書かれ、又『新修往生傳』には「臨淄の人」と書かれてありますが、若し臨淄とすれば、今日の山東省青州府であつて、泗州とは餘程隔たつた所にあります。これはごんなものかと云ふに、『光明大師別傳纂註』には、臨淄と云ふたのは臨淮の寫誤であらうとして居る。或はそうかも知れぬ。『大明一統志』卷七によれば、泗州は唐の玄宗皇帝の天寶の初に臨淮縣と改め、肅宗の乾元の初にまた泗州に復したと云ふことが誌されてあります。すれば畢竟同一の所であります。

その幼年時代のことや、出家の事情も 詳には知れませんが『瑞應刪傳』には「少くして出家す」とあり。『新修往生傳』には「幼にして密州（山東省青州府諸城縣）の明勝法師に投じて出家し、法華維摩を誦す」と書かれてあります。若しこれが事實と

すれば、大師は三論宗系の方と云はねばなりません。そは明勝法師は三論の嘉祥大師と共に法朗門下に居つた方であるからであります。初めは『法華經』や『維摩經』を習はれました。或時淨土の變相圖を見て感激の極「質を蓮臺に托して神を淨土に棲ましめん」と叫ばれたと『瑞應刪傳』に記されてありますが、これは善導大師が少年期に萌え出た他力信念の萌芽であり、また發足の第一歩であつたのであります。

それから一般僧侶の規定に従ひ具足戒を受けたは貞觀六七年、大師が二十歳の頃であつたであります。この頃、經藏に入りて自分の機にかなふ經卷に觸れしめ給へど、深き祈念を凝らしつゝ手に任せて『無量壽觀經』を抜き出し、有縁の經として法の友なる妙開律師と共に、これが研究に心を籠められました。それを『瑞應刪傳』には「具戒を受くるに及び妙開律師と共に『觀經』を見て悲喜交々歎じ、乃ち曰く餘の行業を修すれば迂僻成じ難し、たゞ此の觀門のみ定んで生死を超えん」と記されてあり。また『新修往生傳』には「法華維摩を誦す。忽ち自ら思つて曰く、教門一道一

途に入るにあらず、若し機に契はざれば功即ち徒に設くと。是に於て大藏經に投じて、手に信せて之を探る。『無量壽觀經』を得たり。便ち喜んで十六觀を誦習す。恒に諦かに思惟し西方に忱節す」と記されてありますが、大師と『觀無量壽經』とは、寔に奇しき因縁があるのであります。この手に信せて探り得た『觀無量壽經』こそ實に大師の全生涯を支配し、また支那、日本に於ける淨土門の基礎を築いたのであります。如來の慈光は大師の手を透して、遠く末代の私共にまで及んだのであります。大師が「餘の行業を修すれば迂僻成じ難し、たゞ此の觀門のみ定んで生死を超越せん」と叫ばれた、その一言は聖道門を捨て、淨土門に歸入せられた大師の宣言であります。十六觀門の修習は『觀經』顯説の法門であります。大師はこの觀察の行を修習しつゝ、これに充足せられたでしやう。さりながら、その出觀の時には何となく、淋しみを感せられたに違がありません。それで満たされぬ心を懷いて、その後八九年間に互りて猶求道の旅をつゞけ、名匠高德を訪ひつゝ天下を周遊せられまし

た。これを『續高僧傳』『淨土往生傳』『新修往生傳』には、何れも「寰宇を周遊し道津を求訪す」と云ふ文字で顯はしてあります。この旅は如何なる地方を廻られ、また如何なる人に接したかは凡て不明なれども『新修往生傳』によれば遠く楊子江の南なる鄱陽湖畔の廬山に往つたとして「惠遠法師の勝蹟を欣び、遂に廬山に往いて其遺範を觀、乃ち豁然として思を増す」と記されてあります。廬山の白蓮社は、その昔、晋の惠遠法師が、僧俗百二十三人を集めて、念佛三昧觀を修し、動亂差別の妄念を滅却することに勉められた處でありまして、大師の念佛とは大分その趣は異なれども、そは後年のことであつて、遊歴せられたその當時は、芳躅を忍びつゝ欣求淨土の念を増されたことであらうと思はれます。

二 西河の往訪

さりながら觀想の世界にはなほ淋しみがありませんと見えて、大師は猶名徳の歴

訪をつゞけられ、足を轉じて北方に進まれ、貞觀十五年の頃には、遂に西河石壁谷（山西省太原府）の西南の玄忠寺に達せられました。

云ふ迄もなく、玄忠寺は眞宗の第三祖曇鸞大師が、その晩年止住せられて居つた寺であります。曇鸞大師の滅後凡そ一百年にして、并州の道綽禪師が石壁谷に來り、その芳燭を訪ひ、石に刻める大師の事蹟を見て感動し、涅槃の廣業を擱きて本願他力をたのみつゝ熱烈に『觀無量壽經』を講讀せられ、既に二百遍にも及ばれたのであります。その著作『安樂集』は、『觀無量壽經』の玄義を述べられたものであるが、その中には「念佛三昧は一切三昧中の王なり」と言ひ放たれてあります。かゝる深き信念を以て、道綽禪師は、日に七萬遍の淨業を修し、念佛を鼓吹せられて居たのであります。太原府石壁寺鐵彌勒像頌によれば唐太宗皇帝は、皇后の不豫に當り、道綽禪師の高徳を慕ひ、その蘭若を過ぎり「禪師綽公に禮謁し、便ち衆寶名珍を解き、供養し願を啓す」と書かれてあります。これは皇帝が歸仰せられた一例であります。

が、此の如く一般からも、その高徳を慕はれ、その名譽は遠く聞え渡つて居たのであります。

『觀無量壽經』を以て有縁の經とし、淨土の行業に心身を捧げて居た善導大師は、その道譽を聞き傳へて、その禪室を往訪せられたのは、寔に意義深いことでありま

す。
道綽禪師は陳の文帝天嘉三年に生れられた方でありますから、善導大師よりは五十歳の年長であります。『佛祖統記』卷四十の説によれば、善導大師が道綽禪師を訪はれたのは、貞觀十五年であつたと云ひますから禪師は八十歳、大師は二十九歳の時に相當します。禪師は年七十にして忽然として亂齒が生じたと傳へらるゝ程の强健な御方で入らせられますから、高齡八十、しかも神氣爽然として淨土の行業にいそしみ給へる一世の大徳と、研學求法の熱に燃ゆる若き善導大師が石壁谷の一角、玄忠寺の閑寂なる淨室に於て會見せられました。その時の光景は果して如何であり

ましたでせう。この時、若き大師は心の奥に持つ懊惱の全部を投げ出し「念佛して實に生るゝことを得るや否や」との疑問を披瀝されました。これは自ら觀想には徹底するも、未だ解き得なかつた念佛の意義を領得せんとしたからであります。

私は禪師の『安樂集』を拜讀しつゝ靜かに想像されてならぬことは、この時禪師は先づ一言「但能く念を繋けて止まざれば、定めて佛前に生せん」(安樂集卷上六丁)と平素の信念を呈示せられ、更に淳々として「一切衆生、生死の中にありて念佛すれば、即ち能く一切の諸惡を改變して、大慈悲を成せんこと、彼の香樹の伊蘭林を改むるが如し」と説かれたのではなからうかと思はれます。伊蘭林とは衆生の身の内の三毒三障無邊の重罪で、栴檀とは衆生の念佛の心に喩へられたもので、「一切衆生は念佛を積みて斷えざれば、一念の力能く一切の諸障を斷ず」と云ひ、「何が故に能く爾とならば、念佛三昧を行すれば、一切の惡魔諸障も直に過ぎて難なく、一切の惡神、一切の諸障も遮障すること能はず」と申されてあります。念佛三昧は實に一切三昧

の中の王であります。

惟ふに『觀無量壽經』の歸結は附屬の持名にあります。十六の觀相は『觀無量壽經』の全面を覆うて居りますが、若し附屬持名より振り返りて見れば、念佛を明したものと見得らるゝのであります。隠れたる處々に念佛のひらめきが見えます。『觀無量壽經』の上に『大無量壽經』の「一向專念無量壽佛」と云ふことや、「乃至十念」と云ふことを以て照し來れば「念佛衆生攝取不捨」と云ふことも、下上品の「稱佛名」も、下々品の「稱無量壽佛」も生きて參つて、稱名念佛を明かされた經であることが知られます。第七觀に「此の如きの妙華は是れ本法藏比丘の願力の所成なり」と云ふことも、中下品に「法藏比丘の四十八願」と云ふことも、『大無量壽經』によらねば分らぬのであります。道綽禪師はこの『大無量壽經』を通して『觀無量壽經』を見られて居たのであります。それで『觀無量壽經』の宗旨は觀佛爲宗なりと稱せられながらも、一念の力能く一切の諸障を除く念佛三昧を唱へられたのであります。「但能く專至相續

して斷せざれば定めて佛前に生ず(安樂集卷上)とは、道綽禪師のお諭しの中心であつたこと、想像されます。そして『大無量壽經』を取出して、之を精讀すべきことを勧められました。この嚴肅にして、しかも法悦に満ちた對面によりて、善導大師は定散の要門より弘願の念佛に轉向せしめられたのであります。此間の事情を『續高僧傳』には、たゞ簡單に「行くく西河に至り、道綽師に遇ひ、たゞ念佛彌陀の淨業を修す」と記され『淨土往生傳』には、「唐貞觀中、西河綽禪師、方等懺及び淨土九品の道場を行するを見て、導大に喜びて曰く、これ眞に佛道に入るの津要、吾これを得たり。是に於て篤く勤めて精苦すること頭燃を救ふが若し」と記されてあります。そして『新修往生傳』の第二傳には、『大經』を授けられたことを述べて「程を進めて綽禪師の所に至りて夙心を展開す。綽公即ち『無量壽經』(『無量壽觀經』と記せるものあれども、古本『漢語燈錄』によれば『無量壽經』なりとす。)を授與す。導、卷を披いて之を詳にするに、比來觀る所宛在せり」と記されてあります。然るに禪師の此時

の御答に就ては、何等記されて居りません。たゞ『瑞應刪傳』には「遂に綽禪師の所に至り、問て曰く。念佛は實に往生を得るや否や。師、答へて曰く。各一の蓮花を辨じ行道すること七日にして萎まずば、即ち往生を得ん」と記されてあります。これは實に意外に感じます。思ふにこれは『續高僧傳』卷二十の道綽傳に「貞觀三年四月八日を以て綽、命の將に盡きんとするを知りて事相を通告す。聞いて赴くもの山寺に滿つ。咸、鸞法師、七寶の船上に在りて綽に告げて云く、汝淨土の堂成れり、但餘報未だ盡きざるのみと云ふを見、并に化佛、空に住し天花下散するを見る。男女等裙襟を以て承け得るに薄滑愛すべし。又乾地を以て蓮花を挿むに萎まざるも七日、餘の善相に及んでは殫く紀すべからず」とある記事に本づき、後世では、こんな奇瑞を以て往生を得たる相とし、著者も亦かゝる思想にて記されたものでありませう。道綽禪師が自ら語られたのではありますまいと思はれます。

三 長安の教化

道綽禪師の許にありて久しく解行を積まれた善導大師は、その福音を傳ふべく當時の帝都たる長安(陝西省西安府)に出られたのであります。そして、この長安城外の南方五十清里の所に、終南山と云ふ山水清明幽邃閑寂の名山があります。佛道修行者の修練の地となつて居て『續高僧傳』等の著者たる道宣律師の如きも此處に居て四分律宗を建てられたので、この宗を南山律宗とも稱するのであります。『續高僧傳』の善導傳の初めに「近ごろ山僧善導なるものあまり」とあるは、善導大師が初めこの終南山に居られたことを意味するのであります。それから大師が道綽禪師の許を辭してから直に長安に出られたかと云ふに、私は尙ほ幾年か終南山にありて弘願念佛の行と弘願の觀想の功を積まれたことを信するのであります。『新修往生傳』には「幽に妙門を求むるに功微に理深きものは未だ般舟三昧に出づるものあらず。畢命斯の道

においてす。後、迹を終南の悟眞寺に通る。未だ數載を逾えざるに觀想疲れを忘れ、て已に深妙を成す。便ち定中に於て備に寶閣瑤池金座、宛として目前にあるを觀る。涕泗交々流れ、擧身投地既に勝定を獲、方に隨うて物を利す」と記されてあります。すれば終南山の悟眞寺に居られて、觀行修練せられたのであります。この悟眞寺と云ふのは、隋の淨業法師が終南山の藍田に創設したのであるが、間もなく頽廢したのを、唐の貞觀の初、西方願生の行者、法誠法師が再興したものであります。そして法誠法師は貞觀十四年七十八歳にして入寂せられました。善導大師が悟眞寺へ行かれたのは法誠法師が入寂數年後のこと、思はれます。この悟眞寺の風景の佳きこととは、道宣律師が「山を陞ぎ谷に闚ち、棟を列ね薨を開き、前は重巒に對し、右は斜谷に臨み、雲霧を吐納し、雷霧を下瞰す、余嘗て焉に遊ぶに實に奇觀なり」と記されて居るのでも其一般が想像されます。大師の數多き著作の如きも、その或ものは或は終南山あたりで出來たのではないかと想像されます。

終南山から長安には僅かに半日程であります。教化の爲には時々長安に出られたものと思はれます。そして街頭に立ち坊舎に入り盛んに教化をせられたのであります。龍舒の『淨土文』に「長安に至りたまふ。渇水の聲を聞くに乃ち曰、念佛を教ふべしと。三年の後、長安城の中に念佛は滿つ」とありますが、その教化は疾風迅雷的に進んだものと思はれます。『續高僧傳』には「既に京師に入り廣く此の化を行す、『彌陀經』を寫すこと數萬卷、士女奉ずる者其數無量、時に光明寺に在りて說法す」と記されてありますが、善導大師は光明寺に住せられたのではなく、ときより光明寺に至つて說法せられたものと見えます。

大師の說法せられた光明寺と云ふのは長安の懷遠坊にあつたらしい。そして極めて幽邃なる寺院であつたと見えて唐の段成式の『酉陽雜俎』寺塔記には「光明寺の山庭院は古木崇阜、幽にして山谷の如し」と記されてあります。そして當時此寺には三階教の祖師信行禪師の門人なる慧了が住して居ました。然るに慧了は顯慶元年八月善導大師が四十四歳の時に歿しました。想ふに大師が光明寺での說法は、この通俗的の三階教に對抗して、淨土の法門を獅子吼せられたと考へられます。

大師の長安に於ける教化は光明寺ばかりではなく、晩年には『實際寺』に住せられ、其示寂もその寺であつたやうであります。實際寺と云ふのは長安の朱雀街の西、大平坊にある律宗の寺であつて、隋の大保薛園公長孫覽の妻鄭氏が宅を捨て、立てたものであります。

それから教化の方法として說法以外に寫經或は繪畫をも應用せられました。『續高僧傳』に『阿彌陀經』を寫すこと數萬卷」とあつたのを『瑞應刪傳』には『彌陀經』を寫すこと十萬卷、淨土の變相を畫くと二百鋪」としてあり、『淨土往生傳』に『彌陀經』を寫すこと十萬卷、散施受持す」とありますが、それは畢竟同一のことであつて、十萬卷とは、たい滿數であつて、幾萬卷の『阿彌陀經』を隨つて寫しては隨つて人に授け、發心化導の一端に資せられたものと思はれます。今日で謂へば、文書傳道に相當する

のであります。先年大谷光瑞師の命により橋瑞超氏が新疆地方にて發掘將來した諸種の古寫經の中に『阿彌陀經』の斷片がありました。その卷末の識語の一部は既に缺けて居るが、恐らくは此等數萬卷の一であつたらうと思はれます。その識語には

願往生比丘善導寫彌陀□□□□□

者罪病消除福命長遠佛言若□□□□

此經願生淨土者無數化佛恒沙菩薩

人不令諸惡橫得其便終時見佛上□

得上品生專心者

皆同此輩往生

とあります。この「願往生比丘善導」とあります文字から考へて、大師の願經であつたとは、些しも疑ふの餘地はありません。そして其書體の謹嚴にして優艶なるは唐代の筆たるとは一見明瞭であります。新疆地方から、かゝるものが發掘せられたの

は誰か々當時長安から、かの地方へ携へ至つたものと思はれます。それにしても其寫經の數の甚だ多かつたことは容易に想像せられます。

次に『瑞應刪傳』に「淨土の變相を畫くこと三百鋪」とありますが、これは所謂淨土曼荼羅とか觀經曼荼羅とかと云ふものであらうと思はれます。我國に傳はれる當麻曼荼羅なるものは即ち淨土曼荼羅であつて、大師の『觀經疏』に一致するものであります。すれば善導大師は『觀經疏』を述作せらるゝと共に、淨土曼荼羅を畫かれたものと思はれるのであります。淨土變の圖像の如きは、人をして淨土往生の思想を起さしむるに最も有效なものでありますから、『阿彌陀經』の書寫と共に、『觀經』十六觀の相を圖像に表現し、淨土思想を鼓吹せられたもので、今日所謂、藝術的教化に相當するのであります。唐代には地獄變や淨土變を寺院の壁畫にも畫かれたものであるが、善導大師の畫かれたのは、三百鋪とありますから畫幅として携帶に便にし隨處適宜に之を掲げ、自らの觀行に資し又人をして極樂莊嚴の狀を觀じ、其信仰の

思念を發起せしむるに勉められたものと思はれます。そして淨土變を畫くことは晩年まで續けられたものと見えて『新修往生傳』に示寂の二三日前まで畫かれたことが出て居ります。

また教化をなされる態度を示して『新修往生傳』には「出で、は則ち人の爲に淨土の法を説きて諸の道俗を化し、道心を發して淨土の行を修せしむ。暫時も利益を爲さざることをなし」と記し、又『淨土往生傳』並に『新修往生傳』には「續いて京師に至り四部の弟子を擊發し、貴賤を問ふなく、彼の屠沽の輩亦擊悟す」と記されてあります。されば比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆を擊發して淨土へ願生する喜びを願たれたものであります。貴となく賤となく、富となく貧となく、凡ての民衆を友として教化せられたものであります。この「屠沽の輩亦擊悟す」と云ふことに就て、こんな挿話があります。

長安城に屠兒京寶藏なるものがありました。善導大師が長安の街頭に教化を敷

かれたので上下靡然として其化益を蒙り、念佛の聲は洋々として漲り、滿都の人々は肉食をせなくなりましたから、彼の肉を賣る商賣は寂れて來ました。彼は之を恨み遂に意を決して大師を害せんと刀を隠して大師の住房に躍り込みました。時に大師は念佛を唱へながらこれに接し靜かに西方を指し給へば淨土の莊嚴が現出したもので京寶藏はこの有様に驚き、身を大師の前に投じて懺悔し、遂に念佛の行者となつたと云ふことであります。これは宋遵式の『西方略傳』に出て居る挿話であります。すが、山伏辨圓が親鸞聖人を板敷山にて殺害せんとして稻田の禪房に行つた話は、これに似通ふやうに思はれます。

面會にでも來るものがあれば即ち說法せられ、見聞せざるものには文書を以て傳道せられました。これを『新修往生傳』には「その暫くも禮調を申ぶるとあれば、聞かしむる少法を説き、或は同じく道場に預かりて親子教訓を承くることを得、或は曾て見聞せざるには教義を披き尋ねしむ。或は展轉して淨土の法門を授く」と記され

て居ります。大師が教化の熱心さが偲ばれます。そして大師が願生をすゝめられた結果、捨身往生するものさへ出来ました。『續高僧傳』には「人ありて導に告げて曰く。今、佛名を念じて定んで淨土に生ずるや否や。導曰く。定んで生ず。其人禮拜し訖り、口に南無阿彌陀佛を誦し、聲々相次ぎ光明寺の門を出で、柳樹の表に上り合掌西に望み、倒に身を投じて下り、地に至り遂に死す、事、臺省に聞ゆ」とあります。これは一人だけの事であつて、そんなこともあつたかと思はるゝが『新修往生傳』には「京華諸州の僧尼士女、或は身を高嶺より投げ或は命を深泉に寄せ或は自ら高枝より墮ち、身を焚いて供養するもの略々四遠に聞え、百餘人に向んとす」と記されてゐるのは、或は誇張の言ではあるまいかと思はれます。思ふに『續高僧傳』の遺身篇に、身を切るもの、身を他の動物に供養するもの、入水するもの等種々擧げてゐるのを善導大師の感化の如く書いたものでありませう。

『新修往生傳』の次の文に「もろくの梵行を修し、妻子を棄捨する者、『阿彌陀經』

を誦して十方より三十万遍に至るもの、阿彌陀佛を念じて日に一万五千を得るより十万遍に至るものあり。及び念佛三昧を得、淨土に往生するもの數を知るべからず」とあり『淨土往生傳』に「故を以て京師、左右に至る列郡、經佛を念するもの迹を踵いで是なり」とあるのは『續高僧傳』に「士女奉ずる者其數無量」とある言葉を敷衍したものであつて、左もあるべきことゝ思はれます。

大師が勸化に用ひられた「勸化偈」があります。

漸々に鶏皮鶴髪たり 看よく行歩踴躍たり

假饒金玉堂に滿つれども 衰殘老病を免れ難し。

任是千般の快樂 無常終に是れ到來す

唯徑路の修行あり 唯阿彌陀佛を念せよ

と申すのでありますが、大師が教化にこれを用ひられたと思はれます。生に執着し死の問題を忘れて居るものには極めて適切な痛棒であります。私共は先づ無常と

云ふことに自覺せねばならぬのであります。

四 平素と終焉

善導大師の平生はどんなでありましたか、またその臨終はどんなでありましたか。

處が、『續高僧傳』には、何等の記載がありません。最も『續高僧傳』は、大師の生存中に出来たのであるから、臨終の記事のないのは最もなことではありますが、『瑞應刪傳』には、平素の行爲の一として「禪師平生、常に乞食を樂み、毎に自ら責めて曰く。釋迦、尚、乃ち分衛す、善導、何人ぞ端居して供養を索めんや、乃ち沙彌に至るまで並に禮を受けず」と記されて、その謙虚にして自ら持することを卑くし、沙門の行儀を持して行乞せられたことが偲ばれます。それから終りに「所見の塔廟修葺せずと云ふことなく、佛法東行してより未だ禪師の盛徳あらざるなり矣」と記

されてありますのは溢美の言ではありません。よく其生涯の盛徳を盡したものであります。

『新修往生傳』には、その盛徳を具體化して「導、堂に入るときは則ち合掌胡跪して一心に念佛す。力竭るにあらざれば休まず。乃至寒冷にも亦汗を流すを須ゆ。この相状を以て至誠を表す」と記されましたのは、大師が道場に入りて禮佛懺悔をせらるゝに至誠を籠めらるゝ模様を明したもので『法事讚』の三寶を召請する所に「道場の衆等、各に心を斂め、彈指合掌して頭を叩いて、心を標し、想を運ぶ」と云ひ、「觀念法門』五種増上縁を明す最後の敬白文に「敬つて一切の往生人等に白す。若し此の語を聞き、即ち聲に應じ、悲んで涙を雨ふらし、連劫累劫に身を粉にし、骨を碎き、佛恩の由來を報謝して本心に稱ふべし。豈に敢て更に毛髮も憚るの心あらんや」と明かされ、先づ自ら之を實行せられたのであります。

次に同書に「三十餘年、別の寢處なし、暫くも睡眠せず、洗浴を除いて外曾て衣を

脱せず、般舟・行道・禮佛・方等以て己が任となす」と明したのは『往生禮讚』の初夜無常偈に「苦を度るの船未だ立たず、云何ぞ睡眠を樂まん」と云ひ、中夜無常偈に「汝等臭屍を抱いて臥すこと勿れ、種々の不淨を假に人と名づく。重病を得て箭の體に入るが如し、衆の苦痛集まる安んぞ眠るべき」と云ふ言葉を其儘行はれたものであります。又大師の『六時禮讚』は日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中と晝夜に互りて禮佛・懺悔せらるゝことであり、般舟とは常行道と云ひ、七日或は九十日、三業無間にして三昧に入り、佛境界を現前し、心に悅豫するのであります。此等の行を精進に行せられたのであります。

又其次に「戒品を護持して纖毫も犯さず、曾て目を舉げて女人を視ず、一切の名利、心に念を起すことなし、綺詞戲笑亦未だこれあらず」とあります。『念佛鏡』の中には「善導闍梨」とか、又は「律師西京善導闍梨」と云ふ言葉があり。當時の碑文にも屢善導闍梨と云ふ語が現はれて居るのを見ても、大師は平素戒律を嚴守せられた

ことが偲ばれます。大師と同時代の先輩、道宣律師は終南山に居て四分律を唱へられて居りました。大師の如き意志鞏固にして行業謹嚴なる方は、戒律を嚴守せられたことが偲ばれます。『法事讚』の後懺悔文並に『往生禮讚』の廣懺悔文には、十惡に對する委しき懺悔文があります。この懺悔文に述ぶるが如く、大師は實際に懺悔しつゝ、そして實際に戒品を護られたものであつたと思はれます。

更に『新修往生傳』の次の文に「所行の處、争うて供養を申べて飲食・衣服・四事豊饒なれども皆自ら入れず、並に將て廻施す。好食をば大厨に送りて徒衆を供養す。唯麤惡を食して纔に身を支ふるを得たり。乳酪醍醐皆飲瞰せず」とありますが、これは『往生禮讚』の平旦の偈に「寂滅樂を求めんと欲せば、當に沙門の法を學ぶべし。衣食身命を支ふ、精麤衆に隨うて得」と云ふ言葉そのまゝを實行せられたことを示すものであります。そのみならず『新修往生傳』に「三衣瓶鉢、人をして持洗せしめず始終改むることなし」と記されたのは、善導大師が人師を以て居らず、その謙

虚なる平素の行爲が偲ばれるのであります。

また『新修往生傳』に「所在の處、壞れたる伽藍及び故き塔等を見れば皆悉く營造す、燈を燃し明を續ぐこと歲常絶えず」と記されたのは『瑞應刪傳』に「所見の塔廟修葺せざるることなし」と云ふのと同じことで、大師は堂塔の修繕などにも力を盡されたものであります。この塔廟の造營に就て最も顯著なる事實は高宗皇帝の發願によりて、龍門山に盧舍那佛像及び龕を造顯するに當りて、善導大師は勅によりて、その檢校僧とられたことでもあります。この事は何れの傳記にも見えて居りませぬけれども、『金石萃編』卷七十三にある『河陽上都龍門之陽大唐盧舍那像龕記』に

大唐高宗天皇帝之所建也。佛身通光座高八十五尺、二菩薩七十尺。迦葉阿難金剛神王各高五十尺。粵以咸亨三年壬申之歲四月一日、皇后武氏助脂粉錢二萬貫。奉勅檢校僧西京實際寺善導禪師、法海寺主惠暕法師、大使司農寺鄉韋機、副使東面監上柱國樊元則、支料匠李君

瓚成仁、威姚師積等、至上元二年乙亥十二月三十日、畢功。調露元年己卯八月十五日、奉勅於大像前置大奉先寺、簡召高僧行解兼備者二十七人、關、卽續填創基、住持範法、莫律而爲上首。至二年正月十五日、大帝書額前後、別度僧一十六人、並戒行精勤、住持爲務、恐年代綿邈、芳紀莫傳、勒之頌銘、庶貽永劫云爾。佛非有上法界爲身、無形化物、俯迹同人、有感、卽現無罪、乃親愚迷、永隔唯憑、信因寔賴、我皇圖茲麗質、相好希有、鴻顏無匹。大慈大悲、如月如日、瞻容垢盡、祈誠願畢。正教東流、七百餘載、□龕功德、唯此爲最。縱廣方十有二丈矣、上下方百四十尺耳。

牒 勅旨龍花寺宜合作奉先寺

開元十年十二月五日

とあるによつて知ることが出来ます。開元十年の記録でありますから、大師の滅後纔に三十餘年のもので、第一史料と云はるゝものであります。この咸亨三年は大師

が六十歳、成就した上元二年は六十三歳、大奉先寺を建てた調露元年は六十七歳の時でありました。善導大師がかゝる巨像を造立することの勅命を蒙り檢校となられたことは、如何に大師が造像の智識を持つて居られたかと云ふことが窺知せらるゝ次第であります。また高宗や武后が如何に大師の高徳を崇敬せられて居た程が偲ばれます。

この佛龕は、龕記にもある如く、廣さ十二丈、高さ百四十尺と云ふ巨大なもので、其佛像も八十五尺、七十尺、五十尺といふ驚くべき大なるもので、その制作妙を盡くし美を極め、「相好希有にして鴻顔匹なく、大慈大悲の尊容、月の如く日の如く」とあるが、これは大師の如き熱烈なる信仰があつて始めて出来るもので、唐代造像の代表的な作品となつて居る所以であります。

それから大師が平素の行業を叙べる中に忘れてならぬことは、大師が念佛をせられたら光明が顯はれたとか、化佛が現はれたとか云ふ傳説のあることであります。

これは大師を崇敬する信念より、かく感ぜられたものでありませうが、『淨土往生傳』並に『新修往生傳』には「あるひと導に問て曰く。念佛善く淨土に生ずるや。對へて曰く。汝が所念の如くなれば汝の所願を遂ぐと。對へ已りて、導乃ち自ら阿彌陀佛を念す。是の如く一聲すれば一道の光明ありて其口より出づ。一聲より百聲に至るに光亦かくの如し」と記され、遵式の『往生西方略傳』に「人、至信なるものありて、和尚の念佛するを見れば、佛、口より出づ」と記されてあるなどが、そのものであります。こんなことが果してあり得ることであらうかと云ふ疑を挾むものがないでもありません。これに就て諦忍律師の『善導大師行狀記』には「彌陀は光明熾盛の佛なり、故に無量壽光佛と云。又名體不離の故に名號も全く佛體なり。若爾らば佛體と佛名と佛光と…字の三點の如く差にして無差、無差にして差なり。故に佛名を唱へるときは佛體も現する道理なり。佛光も現すべき道理なり。佛體、佛名、佛光、何ぞ強て懸隔すべけんや、却て是、名體不離、名義具足の深旨を顯すなり。仍

て諸傳に記する所、佛體と云へるも亦可なり、佛光と云へるも亦可なり、往として可ならずと云ふことなし」と辯明してあるのは尤もなことであります。時の人が大師が二六時中唱ふる念佛には、光明が輝き化佛が現はるゝやうに拜まれたのは、如何に大師が時の人から崇敬されて居たことが思ひ知られます。再び白しますが『瑞應刪傳』に「佛法東に行はれてより未だ禪師のごとき盛徳あらず矣」と稱讃せられたのは溢美の言ではありません。

長安城を中心として道俗貴賤のえらびなく、阿彌陀如來の願力を高調して念佛をすゝめ、教化の慈雲を布かれた大師の御一生涯も終焉の日が近づきました。大師の入寂に關しては、古來から捨身説が傳へられて居ます。『續高僧傳』や『瑞應刪傳』には何等の記載がありませんが、『淨土往生傳』に「導此身の諸苦逼迫、情偽變易して暫くも休息なきを厭ひ、乃ち所居の寺前の柳樹に登り、西に向ひ願じて曰く。願はくは佛の威神、驟かに以て我を接したまへ。觀音・勢至來りて亦我を助け、我が此の

心正念を失せず、驚怖を起さず彌陀法中に於て退墮を生ぜざらしめたまへと。願ひ畢り、その樹上より身を投じて自絶す。時に京師の士大夫誠を傾け歸信す。咸く其骨を收め以て葬る。高宗皇帝、其念佛の口より光明の出づるを知り、又捨報の時、精至此の如くなるを知り、勅を下して以て其寺に額し光明となす焉」と記されてあり、『新修往生傳』も殆どこれと同文で、『佛祖統記』卷二十七にも、これを略抄してあります。

併しながら、盛徳、大師の如き方が捨身自絶せられたとは到底信せられませぬ。大師は『往生禮讚』に「願くは弟子等命終の時に臨んで心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、心身に諸の苦痛なく、心身快樂にして禪定に入るが如く、聖衆現前し給ひ、佛の本願に乗じて阿彌陀佛國に上品往生せん」と願求せられて居た位であり、また弟子の懷感が自ら罪障の深きを歎き、食を絶して命を畢らんとした時にも、大師が之を許し給はなんだやうなことに考へても、大師自身が捨身せられたと云ふや

うなことは信せられませぬ。これは『續高僧傳』に善導大師が光明寺にありて説法せられて居た時、或人が捨身往生したことを記して「人あり導に告げて曰く。今佛名を念ず定んで浄土に生るゝや否や。導曰く。定んで生る。その人禮拜し訖り、口に南無阿彌陀佛を誦し、聲々相次いで光明寺の門を出で、柳樹の表に上り合掌西に望み、倒に身を投じて下り、地に至りて遂に死す」と云ふ記事から訛傳して書かれたものと思はれます。唐代に在りては捨身往生を以て奇特の行爲となすの風習がありまして『續高僧傳』や『宋高僧傳』には何れも『捨身篇』なる一篇を設けて捨身往生を賞譽して居る位でありますから、大師を稱揚する考へにて、わざと捨身往生のやうに造りましたものではあるまいか。私は『新修往生傳』の大師の第二傳に「後、所住の寺院の中に於て浄土の變相を畫く。忽ち催して速かに成就せしむ。或その故を問ふ。則ち曰く。吾れ將に往生せんすとす。住すること三兩夕なるべきのみと、忽然として微疾あつて室を掩ふ。怡然として長逝す。春秋六十九」とありますのが、大師

の往生の實相であると思ふのであります。

御入滅の年時に就ては『釋氏稽古略』卷三には、高宗帝の龍朔二年に入滅せられたとしてありますが、先きに掲げた龍門の『盧舍那像龕記』などから考へても、この頃には大師は確に生存せられて居たのでありますから、これは何等かの間違ひであると思はれます。それよりも唐福壽寺玄暢が撰述した『帝王年代錄』卷一には「高宗高帝辛巳永隆二年三月二十七日善導和尚亡す」とあり、『新修往生傳』の第二傳には「永隆二年三月十四日」とあります。日は違ふが年月は同一であつて兎も角、永隆二年三月に六十九歳を以て入寂せられたとは確かなやうに思はれます。この『帝王年代錄』は唐の武宗の頃に撰ばれたもので『新修往生傳』よりも二百年程も古い史料でありますから信が措けるやうに思はれます。我が眞宗にては、古くから、この永隆二年の三月二十七日説を執りて、存覺上人の『兩師講式』にも之を用ひられて居ります。樂邦往生の素懷を遂げられた大師の遺骸は、萬人の盡きせぬ悲哀の涙に送られて、

長安の南方三十里なる鳳城の南神和源に葬られました。そして靈塔を築き、墓側に香積寺と稱する伽藍が建てられました。

これに就ては『金石萃編』卷八十六に載せてある「大唐實際寺故寺主懷暉奉勅隆闡大法師碑銘 並序の中に

(上略)時有親證三昧大德善導闍梨、慈樹森疎、悲花照灼、情祛□漏、擁藤井於蓮臺、聲化無涯、駢鐵圍於寶國。卽聞盛烈、雅締師資、祈解脫規、發菩提願、一承妙旨、十有餘齡、祕局眞乘、親蒙付屬、自惟薄祐、師資早喪、想遺烈而崩心、顧餘恩而雨面。爰恩宅地、式建墳塋、送於鳳城南、神和原崇靈塔也。其地前終峯之南鎮、後帝城之北里、哥鍾沸出、移上界於陰門、泉流激灑、比連河於陽面、仍於塔側廣構伽藍、莫不堂殿崢嶸、遠摸初利樓臺、岌業直寫祇園、神木靈草、凌歲寒而獨秀、葉暗花明、逾嚴霜而靡萃、豈直風高氣爽、聲聞進道之場、故亦臨水面山、菩薩全眞之地。又於寺院造大



率堵波塔、周廻二百步、直上一十三級、或瞻星揆務、或候日裁規、得天帝芳蹤、有龍王之祕跡、重々佛事窮鷲嶺之分身、種々莊嚴盡崑丘之異寶。但以至誠多感、能事冥資、故能遠降宸衷、令資舍利計千餘粒、加以七寶函筒、隨此勝緣、百寶幡花、令典供養(下略)

とあるによつて、神和源に葬られたことも、また其處に建てられた香積寺の規模なども明かであります。この實際寺主懷暉と云ふ方は、善導大師の高足の弟子でありまして、大師の滅後實際寺を董された方であります。總章元年、三十歳の時、高宗皇帝から召されましたが、これを辭して出家を乞ひ西明寺にて剃髮し、それから善導大師に従ひて祕局眞乘、親り付屬を蒙るに至つた方であります。大師が、示寂せられた時は四十三歳でありましたが、神和源に大師の遺骸を葬り、十三級の靈塔を築き香積寺を建て、また勅によつて舍利千餘粒を七寶の函筒に收めて之を奉じました。そして其後進の淨業法師をして靈塔を守護する爲めに香積寺に住せしめ、自ら

は長安の實際寺に住したのであります。そして中宗の嗣聖十八年に示寂し、神龍元年に隆闡大法師と追號せられました。此等の事蹟を懷暉の弟子の大溫國寺主恩莊なるものが、三十八年の後なる天寶二年に記載して、實際寺の境内に建てたがこの碑であります。

また善導大師の弟子、淨業法師のことは『金石萃編』卷七十五に「大唐龍興大德香積寺住淨業法師靈塔銘並序」が載せられてありますが、この香積寺と云ふのは前にも云ふが如く、善導大師の墳墓を守る爲に建てられたもので、淨業が住することになりました。淨業法師は永隆二年、大師示寂の時には二十八歳でありましたが、延和元年に春秋五十八歳を以て寂し、同年十月五日、善導大師の靈塔の傍に陪葬せられましたことが、この淨業法師の靈塔銘に誌されてあります。この碑は十三年の後なる開元十二年に建てられたものであります。この香積寺に就ては『長安圖志』卷十二に

開利寺 左縣(長安)南三十里皇甫邨、唐香積寺也。永隆二年建。皇朝(宋)太平

興國三年改

とありますから、宋の太平興國三年に開利寺と改名されました。この寺が永隆二年に建てられたとすれば、大師の入寂が永隆二年であつたと云ふことも容易に想像せらるる次第であります。

懷暉、淨業の外に懷感禪師と云ふ方が、やはり善導大師の弟子でられました。禪師は『釋群疑論』七卷を著されましたが、未だ完成せぬに先んじて示寂せられたので、懷暉が修補せられたことが其序文の中に見えて居ります。まだ此外にも善導大師には、弟子が居られたではありませうが、主たるものは先づこの方々であります。

五 滅後の大師

善導大師が滅後、その法門が如何に傳流せられ、その遺徳が如何に輝いたかといふことを一瞥しまするに、門弟の懷暉及び懷感が、その遺徳の發揮につとめられたことは、想像に難くないのであります。また大師の墓所に建てられた香積寺の主となつた淨業法師等の如きも、また其遺徳を發揮せられたこと、思はれます。

かくて唐末に及んで道鏡・善道の二人が選んだ『念佛鏡』の中には、大師の著『念佛集』中にある念佛の功德二十三種を挙げ、また其行業にも及んで居ります。これと前後して唐文諡・少康共録『往生西方淨土瑞應刪傳』宋代に入りて、戒珠の『淨土往生傳』王古の『新修往生傳』は何れも大師を傳ふるに古きものであつて、宋以後の傳記の基本をなして居るものであります。

これに次いで王日休の『淨土文』卷五、宗曉の『樂邦文類』卷三、志盤の『佛祖統記』卷二十八、卷二十九、卷四十、本覺の『釋氏通鑑』卷八等には、傳記若くは逸事が記載せられ、『淨土文』卷十二、『樂邦文類』卷四には『臨終正念訣』（或は臨終往生正念

文と云ふ）『淨土文』卷五、『樂邦文類』卷五には『勸化偈』が載せられてあります。

その後元代には普度の『蓮宗寶鑑』卷四、明代には大祐の『淨土指歸集』卷下、道衍の『諸上善人詠』株宏の『往生集』卷上には其傳記が載せられ、覺岸の『釋氏稽古略』には大師入滅の異説が擧げられてあります。其他廣貴の『蓮邦詩選』には、大師の『勸化詩』が載せられてあります。

清代に及んでは周夢顔の『西歸直指』卷四、愈行敏の『淨土全書』卷下、瑞璋の『西方彙征』卷上、賀獻書の『淨土要言』には傳記若くは逸事が載せられ、周克復の『淨土晨鐘』卷一に『臨終入觀文』道霏の『淨土旨訣』には『勸化詩』の毎句を初に置きたる詩八首、彭際清の『西方公據』卷下、並に同『念佛警策』彭希涑の『淨土聖賢錄』卷二、古昆の『蓮宗必讀』には『往生禮讚』の序文の一部並に『臨終入觀文』張師誠の『徑中徑又徑』には『臨終正念訣』が掲げられてあります。

併し明清以後は何れも『淨土文』『樂邦文類』『佛祖統記』あたりを襲踏するのみで

あります。又支那に於ては善導大師の教義又は、法門に就て之を發揮した何等の文獻がないのであります。それは大師の法門を詮顯したる『四帖疏』等が唐末五代の頃、既に氓滅して傳はらなかつたのが主なる原因であります。

然るに日本に於ては、奈良朝時代に既に五部九卷が渡來し、平安朝時代より源信・永觀・珍海等の書に大師の著作は引用せられ、法然上人の偏依善導によつて其研究は益々盛んとなり、親鸞聖人を初とし、西山の證空・鎮西の良忠等、何れも蘭菊美を競ひ秀を鬪はし、其教義の詮顯せらるゝ所が多く寔に、花と咲き實を結ぶに至つたものであります。

奈良朝時代に其萌芽を出し、平安朝に於て生ひ立ち、鎌倉時代に於て花と咲き實を結ぶに至つた浄土の思想は、足利時代・徳川時代に及んでは爛熟期に入つたと云ふべきであります。更に明治以來泰西の物質文化が沛然として輸入せらるゝに及んでは、反つて浄土なる概念が明かにせられない憾がないとは云はれないのであり

ます。言ひ換ふれば今日では浄土の概念は、一般世人に取つては縁遠いものとなつて居るのではなからうかと思はれることでもあります。勿論浄土とか極樂とか云ふ言葉は用ひられ、浄土眞宗とか浄土宗とか云ふ宗派も存在はして居りますが、その浄土とか他方とか云ふ言葉が、正當に解せられて居るかどうかと云ふことは甚だ疑問であります。有體に云へば、今日の我國民の多くは、智識階級と云はず、一般民衆と云はず、極めて皮相的の概念しか持つて居らないものではないかと思はれます。それにも關はらず進んでそれを明かにしやうとする程の興味も持たないのが、一般の大勢であると考へられます。

或者は浄土の思想を以て消極的なるあきらめ主義と解し、或者は空想的藝術的のものとして解し、或者は厭世的高踏的のものとして解し、現代社會とは没交渉のものとして考へ、社會主義者の如きは、宗教を以て阿片なりと稱し、或は反抗的になるものもありま

す。又浄土そのものに對しても、或は物質的のものとし、或は觀照的のものとし

或は空想的のものとし、一つも其本質に觸れては居りません。一言にして之を云へば、今日は淨土の教門に取つては受難の時代と云はなければならぬのであります。

これは其教徒たるものが先賢の精神のある所に實參し、之を時代思潮に適應するやうの説明せねばならないのであります。それには先づ淨土の思想を高潮せられた先賢の遺著に親みて、之を讀破せねばならぬのであります。たゞ文句の解釋だけでは駄目であります。先づ其書の梗概をつかみ更に先輩の指南を辿りて、本質的に其中核に向つて進まねばならぬのであります。そして、その書の精神なり信仰なりを、つかみ得ることゝなれば先賢がこゝに復活して、社會を感化することゝなるのであります。徒に現代思想の悪化を恐るゝには足らぬのであります。

凡そ理想が高ければ高き程、現實より遠き彼岸のものとなるのであります。眞實に生きんとすればする程、現實そのものを肯定出来ないのは自然であつて、淨土の法門はこゝに生命が存するのでありますから、如何に世界が發展しても、プロレタリアの思想が如何に彌漫しても、現實には決して十分なる満足が得らるゝものではない、ありません。こゝに淨土教の生命があります。

淨土の思想を以て消極的なるあきらめ主義と解し、或は社會改良の阿片なりと考ふる如きは、最も皮相なる見解であつて、決してそんなものではないのであります。或は又、空想的・藝術的のものと考ふるも皮相の考へでありまして、そんな淺薄なものではないのであります。藝術的に記載せられ、或は空想的にも記載せられ、また厭世的色彩もないとは云へませんが、それは現實を肯定せぬからであります。又淨土そのものにしても物質的にも、觀照的でも空想的のものではないのであります。善導大師以前でも、また其以後にても斯く考ふるものがないではなかつた。否、大に之れありでありましたが、これに極力反對の意見を持たれたのが大師であります。それで先づ何を差し措いても、大師の著作に就て大に實參すべきであります。

行者當に知るべし。若し解を學せんと欲は、凡より聖に至るまで、
乃至佛果まで一切さはりなし、みな學ぶことを得るなり。若し行を學
ばんと欲は、必ず有縁の法に藉れ、少しき功勞を用ゐるに多く益を得
ればなり。(散善義下)

第二編 大師の著作

大師の生活に關する記録は十分ではありません。併しながら大師の著作は其大部分が現存して居ますから何よりの幸ひなことであります。私共は大師の思想なり信念なりは、此等の著作によつて窺ふことが出来るのであります。これを信仰的に、はた思想的に詳細にすることは、後章で親鸞聖人の『善導和讃』を通して窺ふことに致しますが、今は其著作の梗概を窺ふことに致します。

大師の著作の主たるものは、云ふ迄もなく五部九卷であります。五部九卷と云ふのは、第一が『觀經疏』四卷。これを四帖の疏と云ひ、又は本疏とも御疏とも稱します。次が『法事讚』二卷『觀念法門』『往生禮讚』『般舟讚』各一卷を具書と稱します。具書とは、本疏に離れずして具したる書と云ふの義。或は具は具足と熟し、圓備成就すると云ふの義にて、本疏は經の文々句々を解して、安心を悉く明し、餘の四部には、その安心より顯はるゝ起行作業の邊を明し解行全く具はり、全備具足するとの意であります。それで四帖の疏をば解義分と云ひ、其他の四部をば行儀分と申し

ます。

此等の書の述作なされた年次に就ては、何等の記載がありませんから知ることは出来ませぬ。淨土宗の良忠はその著『法事讚私記』に『觀經の疏』は經の文義を解す先づ之を撰すべし、餘の四部は其行儀を明す、應に後に之を集むべし、解行の次第理必ず然るが故に。四部の中に就て前後定め難し。且く五種正行の次第に依りて前後を判せば、『法事讚』は『阿彌陀經』を讀む、故に先づ集むべし。『觀念法門』は觀佛等を明す故に次に集むべし。『往生禮讚』は禮の儀則を明す故に次に集むべし。『般舟讚』は讚嘆の行を明す。故に後に撰すべし」と申されてありますが、この五正行に配當せることは、隨分こぢつけのやうにも思はるれども、古來から五部九卷の調卷の次第は右のやうになつて居ります。併しこれは必ずしも述作の年次の順序と云ふ譯ではありません。『觀經疏』は理論的方面であつて、大師が聖道諸宗に對抗して、如何に弘願他力の念佛を高調し給ひしかと云ふことを知ることが出来ます。そして具書四部は念

佛行者の行業作法を示されたものであります。そして『法事讚』は一夜或は一日の行法、『觀念法門』は一日七日の行法、『般舟讚』は七日乃至九十日の行法で此等はみな別時行でありますが、『往生禮讚』は專修念佛の行者の日別の勤行の作法を示された長時行なのであります。

以下少しく此等の典籍の概要を叙述することに致します。

一 觀無量壽經疏 四卷

略して『觀經疏』四帖疏』證誠疏』と申します。慧遠・智顛・吉藏等が聖道自力の意を以て『觀無量壽經』を解釋するに對して一經の深旨を探り、聖僧の指授を蒙り、淨土他力の意を以て解釋したものでありまして、奥書の文には「某、今、此の『觀經』の要義を出して古今を楷定せんと欲す」と書いてその抱負を示し、且つ毎夜夢中に化僧より玄義の科文を指授せられたことを明し、最後に「この義已に證を請ひ定

め竟んぬ。一字一句も加減すべからず、寫さんと欲するものは、一に經法の如くすべし」と明されてあります。實に諸佛證誠の聖典であつて、また古今楷定の妙釋と云はるゝのがこの『四帖疏』であります。因に『四帖疏』とは『玄義分』『序分義』『定善義』『散善義』の四帖から成立して居るからであります。

玄義分

『玄義分』とは、『觀經』の幽玄なる義理を明す部分であると云ふ意味で、一番初に「先づ大衆を勸めて願を發して三寶に歸せしむ」と標した『歸三寶偈』があります。偈は十四行で五言五十六句から成立つて居ります。先づ初に道俗時衆等、各無上心を發せども、生死甚だ厭ひ難く、佛法復欣ひ難し、共に金剛の志を發して横に四流を超斷せよ、彌陀界に願入して、歸依し合掌し禮したてまつれ」と自力の菩提心に簡んで他力の金剛心を示し、彌陀に歸依せしめよと大衆を勧められてあります。

次に善導大師、自ら三寶に歸敬せらるゝ相を述べて「世尊我れ一心」と仰せられてあります。これは『淨土論』の天親菩薩の言葉遣ひを倣ひ給ふたのであります。大師が「盡十方の法性眞如界(法寶)報化等の諸佛(佛寶)一々の菩薩身、眷屬等の無量なると、莊嚴せると及び變化なると、十地と三賢と(僧寶)に專精無二に歸命する相を顯はさせられたのであります。それから佛菩薩に加被を請はせられて「我等咸く三佛菩提尊に歸命したてまつる、無礙の神通力をもて冥に加して願はくは攝受したまへ、我等咸く三乗等の賢聖の佛の大悲心を學びて、長時に退することなき者に歸命したてまつる。こひねがふらくは遙に加被したまへ、念々に諸佛を見たてまつらん」と切なる願を述べさせられ、更に『四帖疏』を造るに就ての興由として、二尊の教に遇ふの慶を述べて「我等愚痴の身、曠劫より來、流轉して、今、釋迦佛の末法の遺跡、彌陀の本誓願と極樂の要門とに逢へり」と仰せられてあります。私共は先づ善導大師が「我等愚痴の身」と謙遜せらるゝ所に、その尊い人格を

思はずには居られないのであります。更に願生の心を明して「定散等しく廻向すれば、速に無生身を證す」と仰せられ、説偈の意を示して「我れ菩薩藏頓教一乘海に依り、偈を説いて三寶に歸して佛心に相應せしむ」と仰せられ、更に正しく志願を述べて「十方恒沙の佛、六通を以て我を照知したまへ、今二尊の教に乗じて廣く淨土の門を開かん」と仰せられてあります。この「今乘二尊教、廣開淨土門」が正しく「四帖疏」を造る精神であります。かくして發願廻向を明して「願はくは此の功德を以て平等に一切に施し、同じく菩提心を發して安樂國に往生せん」と、自行化他の熱情が溢れて、こゝに『觀經疏』一部が成立したのであります。

『玄義分』の本文には第一序題門、第二釋名門、第三宗旨門、第四說人門、第五定散門、第六和會門、第七得忍門の七門を立て、あります。

第一の序題門は、眞如の深廣なることより筆を起して釋尊一代の化儀を明し、出世の由致を示され、更に韋提の致請によりて他力教の興る所以を述べ「娑婆の化主

は其請に因るが故に、即ち廣く淨土の要門を開き、安樂の能人は別意の弘願を顯彰す」と仰せられてあります。この要門と云ひ、弘願と云ふことは、善導大師が初めて用ひられた御言葉であります。それで次にこれを説明して、要門とは『觀經』に明す定散二善の行を廻向して往生を求願することであり、弘願とは『大經』に明す如く、一切の善惡の凡夫が往生するに、皆阿彌陀佛の大願業力を増上縁とすることであるとの説明を加へられてあります。更にかく釋尊が要門を説き、彌陀如來が弘願の法を顯彰し給ふ所以は、釋尊は此方より去けと遣はし、彌陀は彼の國より來れと迎へたまふ、二尊一致の密意であると示され「彼に喚び此に遣はす、豈に去かざるべけむや」と申されてあります。

第二の釋名門には『佛說無量壽觀經』と云ふ經題を釋するのでありますが、佛とは覺と翻じ、自覺々他覺行窮滿の意であるとし、説とは口音に陳唱すること、無量壽は梵語の南無阿彌陀佛を、歸命無量壽覺と翻する梵漢相對と、無量壽は法で覺は

人である云ふ人法相對と、更に觀境に約して淨土の依正二報を『觀經』の定善觀に引合せて釋せられ、次に「觀とは照なり」と釋し、更に「常に淨信心の手を以て、智慧の輝きを持して彼の彌陀依正等の事を照す」と、定善の觀法も信心の力より顯はるゝことを述べられ、次に經の字を釋し、往生の益を明されてあります。

第三の宗旨門には、此の『觀經』には觀佛と念佛の兩宗あることを述べ、一心に廻願して淨土に往生するが體で、また『觀經』は菩薩藏に收め頓教の攝であると明されてあります。

第四の説人門には『觀經』は佛の自説であつて、王舍城なる頻婆娑羅王の王宮にて、韋提希夫人等の爲に説き給ふたと辨じてあります。

第五の定散門には、先づ能請・所請の人、能説の人、所説の人、能爲・所爲の人なる三重六義を明し、次に四番の問答を設けて、定善は韋提の致請で、散善は佛の自開であると云ふことを述べ、また所被の機は謗法・無信・八難・非人以外のものは、如

何なるものも、佛の願力に乗じて往かざるはないと明し、更に定散二門を釋し古師の解を對破せられて居ります。

『今この『觀經』の中の十聲の稱佛は、即ち十願十行ありて具足す。云何が具足する。南無と言ふは即ち是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふは即ち是れ其の行なり、斯の義を以ての故に必ず往生を得』と示され、又「佛の願力を以て皆往かざることをなし、故に易と名づくるなり」と示され、佛が衆生にかはりて永劫に修せし願行を、六字の御名に封じこめて衆生に與へらるゝによりて、無願無行の衆生が、この機のみなりで往生が出来るのであると云ふ旨を詮顯せられました。この解釋こそ實に徹底せる他力義の根柢をなすもので、善導大師の大なる勳功と云はねばならぬのであります。この義を一層鮮明にせられたのが、親鸞聖人の『教行信證』行卷に「南無の言は歸命なり(乃至)。歸命は本願招喚の勅命なり。發願廻向といふは、如來すでに發願して衆生の行を廻施したまふの心なり。即是其行といふは、す

なはち選擇本願これなり。必得往生といふは、不退の位に到ることを得ることをあらはす」と仰せられた言葉であります。二師は肝膽相照すと云ふものであります。次に第六の和會經論門には淨土には、二乗種は生せずと云ふ義を會通して、彌陀の淨土は報土であつて化土でないといふことを明かにし、凡夫は彌陀の本願他力に乗じて報土に往生するのであると云ふ旨を示されてあります。

第七の得忍門には、韋提希夫人の得益の分齊を料簡せられてあります。更に最後に「此の義周りて三たび前證を呈する者なり矣」と仰せられて證明が誌されてあります。これは『散善義』の最後に誌されてある。毎夜夢中に化僧が現はれて、玄義の科文を授けられたと云ふことでありまして、如何にも敬虔なる信念の上よりこの疏は描き出されたものであるかと云ふことが窺はれる譯であります。

序分義

『序分義』とは、先づ『觀經』の序分に當る文句を釋するのでありますが、從來の『觀經』を註釋せられた方は、一經を序分・正宗分・流通分と云ふ三分説によられたのであります。善導大師は、文科を五門に分ち、一に『觀經』の「如是我聞」より「五苦所逼云何得見極樂世界」に至る迄を序分とし、二に日觀の初句なる「佛告韋提希汝及衆生」より、下品下生の終に至る迄を正宗分とし、三に「說是語時」より「諸天の發心迄を得益分とし、四に「爾時阿難」より「皆大歡喜」迄を流通分とし、是を王宮會と云ひ、「爾時世尊」より「禮佛而退」の一段を耆闍會とせられました。（これにまた三分あり）そしてこの五門分別のことを先づ初に述べ、それから其序分を釋するのが序分義であります。この序分の中に二序七縁と見ると、三序六縁と見るの義別があります。二序とは證信序、發起序であつて、その發起序の中に、第一化前序、第二禁父縁、第三禁母縁、第四厭苦縁、第五欣淨縁、第六散善顯行縁、第七定善示觀縁の七科があると思つてあります。また三序とは化前序を前の二序に加へるから三

序となるのであるが、そのかはり、下は六縁となるのであります。

第一の化前序とは『觀經』を説く迄に、聖道諸教を説かれて居たことを以て『觀經』教化の前方便とするのであります。言ひ換ふれば『觀經』は王舎城の韋提希等の爲めに説かれたので、それ迄に耆闍崛山にありて説法せられて居られたことを初に叙してあります。これが化前叙と云ふので、これを四節に分ちて如來が化を起すの時と、化主と如來遊化の處と、佛の徒衆とが明されてあります。

第二の禁父縁とは、阿闍世太子が父の頻婆娑羅王を監禁した因縁であります。これを七節に分ち、先づ頻婆娑羅王の所居の王舎城が如來が化を起された處なること阿闍世太子が惡人に悞られた所を信受したこと、更に父王が子の爲めに幽禁せられた韋提希夫人が密に王に食を奉ること、父王が幽禁せらるゝに因り佛に説法を請ふたこと、父王は請によりて聖法を蒙ることが出來たこと、食と聞法とによりて多日死せざりしことが明されてあります。

第三の禁母縁とは、阿闍世太子の母韋提希夫人をも監禁した因縁でありまして、八節に分ちてあります。先づ阿闍世太子が父の王が、今由ほ存在するか否やを問ふたこと、守門のものが具さに事を明したこと。阿闍世王は韋提希が父王に食を贈り沙門が説法するを聞いて、大に瞋怒して母を殺さんとしたこと、月光と耆婆の二臣が直諫したこと、阿闍世王が怖畏を懷いたこと。二臣が重ねて諫めたこと。闍王は諫を受けて母の殘命を放したこと、母を深宮に閉置したことを明してあります。

第四の厭苦縁とは、韋提希夫人が阿闍世太子に幽閉せられて、娑婆の苦を厭はれた因縁でありまして、四節に分れてあります。先づ夫人が子の爲めに幽禁せられて愁憂すること、夫人が作禮して遙に請はれたこと。世尊が請を容れて隱に王宮に顯はれ給ふこと、夫人が佛を見たてまつりて傷歎したことが明されてあります。

第五の欣淨縁とは、韋提希夫人が淨土を忻はれた因縁であります。八節に分ちてあります。先づ夫人が自身の苦に遇ふて世の非常を覺り、憂惱なき處を欣はれた

こと、閻浮提の濁惡なることを明し、更に夫人は真心徹到して苦の娑婆を厭ひ、樂の無爲を欣うて永く常樂に歸すべきことを明されて「無爲の境は輕爾として階ふべからず、苦惱の娑婆は輒然として離るゝことを得るに由なし、金剛の志を發すにあらざるよりは、永く生死の元を絶たんや」と申されてあります。更に夫人が世尊に求哀懺悔したこと、夫人が清淨處に生ずるの行を請はれたこと、世尊が光臺の上に十方諸佛の淨妙の國土を現せられたこと、夫人が所現の淨土を悉く見られたこと、その中にて別して西方淨土を選ばれたことが明され、「如來密に夫人を遣はして別して選ばしめたまひしことを致す」と結び、佛力を加して韋提に彌陀を選ばしめられたのであるとのことを述べられ、更に韋提は思惟正受(三昧のこと)を教へ給へど願はれたことを明されてあります。

第六の散善顯行縁とは、正宗分の散善を引き起さんが爲めに三福の行を顯示すること、これが散善の行を顯はす縁となるから顯行縁と申すのでありまして、五節

に分ちてあります。先づ彌陀法を説くことが、佛の本心に稱ふたので微笑して欣ばれ、佛の口より放ちたる光が頻婆娑羅王の頂きを照して利益を施されたことを示し、それから佛の説法が始まり「阿彌陀佛、此を去ること遠からず」と云ふに三意のあること、韋提希のみならず未來世の一切凡夫も、淨土に往生することが出来ること、三福(世福・戒福・行福)を開顯して散善の根機に應じ給ふこと、決定して心を注むれば必ず往生すると云ふことを明されてあります。

第七に定善示觀縁と云ふは、正宗分に明す定善十三觀を示す爲の方便縁由と云ふことでありまして、七節に分ちてあります。先づ韋提希夫人が、極樂に生せんことを願じたので、淨土の門を開説して常没の衆生の爲に清淨業を説くと云ふこと、夫人の間が佛の御心に契ふたといふこと、佛語を受持し宣説することを勧められたこと、夫人及び未來の衆生が、想を西方に注めて淨土の依報莊嚴を觀すれば、佛力によりて益を得ること、韋提希は實の凡夫であると云ふこと。諸佛には特異の方便が

あつて、淨土を見しむることが出来ること、佛滅後の衆生が云何にして、淨土を觀見するかと尋ねられたことが明かされてあります。

以上が『序分義』の大綱であります。これを要するに『觀經』の正所被となる機を示されたのが序分であります。心想羸劣の韋提希夫人及び濁惡不善、五苦に逼めらる所の滅後の凡夫であります。この序分から見『觀經』は機の眞實を明すと申すのであります。我が親鸞聖人はこの『序分義』にあとづけられて『觀經和讃』に廣く機の眞實のすがたを顯はさせられたのであります。

定善義

『定善義』は、前の『序分義』の終りに、韋提希夫人が佛滅後の衆生は、如何にして淨土を觀見するかと尋ねられたに對して、佛が極樂の依正二報を觀察する十三の觀法を説明された一段であります。これは韋提の請によりて説かれたもので、其後、

散善の九品は佛が自ら開かれ流通に至りて念佛を附屬せられてあります。序分に明してあります心想羸劣の凡夫に適した藥は念佛の一法ではあります。韋提希夫人は初からこの念佛を説いて下されと望まぬから、先づ定善を説き、次に散善を説き、遂に念佛に誘引するのであります。それで序分の終りに「異の方便あり」と申されてあります。すれば定散の二門は方便の法と云ふべきであります。

その『定善義』には『觀經』の日想觀、水想觀、地想觀、寶樹觀、寶池觀、寶樓觀、華座觀、像觀、眞身觀、觀音觀、勢至觀、普觀、雜想觀の十三觀が釋せられてあります。善導大師以前の諸師は『觀經』正宗分に明された十六觀を悉く定善とし、日觀より寶樓迄の六觀は依報觀、華座より勢至に至るの五觀は正報觀、普觀は上の所觀の淨土に、自身往生の想をなして之を觀するから自生觀と名づけ、雜觀は鈍根の爲に丈六の小身を觀することを開き、終の三觀は九品の機が往生する相を觀するから他生觀と名づけ、上來の十六觀を皆定善と判するのであります。然るに善導大師は

十三觀のみを定善とし、九品を散善と定めました。

凡そ諸經の所説の觀門には、理觀・事觀の二種がありまして、理觀とは、法相の唯識觀・三論の八不中道觀・華嚴の法界觀・天台の一心三觀・眞言の阿字觀等の如く、眞如の妙理を自己の心中に觀すること、事觀とは『觀佛三昧經』・『普賢觀經』等の所説の如く、佛菩薩及び淨土の依正の境界を觀する觀法であります。今『觀經』の觀法を慧遠・智顛・吉藏等の諸師は、事に即するの理觀とするのでありますが、善導大師は淨土の依正を觀するの事觀とし、指方立相の觀とか立相住心の觀とかと仰せられて、理觀であるとする諸師の説を破斥せられました。それは像觀を釋する下に委しく示されてあります。

第一の日想觀は、淨土を觀する豫備として、日没の相を觀するのであります。文は五節に分たれ、初に心を注めて直に西方を指して餘の九域を簡ぶは、これを以て身を一にし、心を一にし、廻向を一にし、處を一にし、境界を一にし相續を一にし

歸依を一にし、正念を一にするなり」と述べられてあります。それから第二節の處に日想觀を修する三理由として、方處識知として衆生をして境を識りて心を住めしむること、業障識知として自らの業障に輕重あることを知らしむること、光明識知として彌陀の依正二報の莊嚴が、日輪に百千萬倍超過することを知らしむことを擧げ、尙結跏趺坐の方法から觀想の方法までを細かに示指されてあります。諸師は方處を識知する爲めと云ふことだけでは知つて居れども、その他の事には一向氣がつきませんでした。

第二の水想觀は淨土を觀する豫備として淨土は平等にして、内外映徹せることを觀知せしめるのであつて、文は六節に分たれてあります。初めに觀想の方法を委しく説明され、第二節に淨土の地下の莊嚴を七節に分けて説明し、第三に地上の莊嚴、第四節第五節に空裏の莊嚴を明されてあります。

第三の地想觀から眞觀であります。文は六節に分ちて第二節には、心を凝らすこ

と絶えざれば淨土の相を見、正受と相應して三昧を證することを説き、第四節には流通を勸發し、第五節には觀の利益を明されてあります。

第四の寶樹觀は、十節に分ちて釋され、七重寶樹の雜飾されたことは、法藏菩薩の因力により自然にあらしむることを述べられ、これを觀ずるの方法を明されてあります。

第五の寶池觀は、十節に分ちて淨土の寶池觀を釋され、池底は「雜色の金剛を以て底沙とする」と云ふを釋して「金剛とは即ち是れ無漏の體なり」と述べられてあります。此等の御言葉からでも淨土は無漏の境界と云ふことが知られます。

第六の寶樓觀は、十一節に分ちて、寶樓の莊嚴を明してあります。

第七の華座觀は十九節に分ちて華座の觀法が明されてあります。「觀經」で拜讀致しますと、華座觀を説く初に當り、佛が韋提希に對して「當に汝の爲に苦惱を除くの方を分別解説すべし」と仰せられた時、無量壽佛が觀音勢至と共に空中に住立せら

れたと云ふ一段がありますが、これを諸師は第七觀以下の十觀が起る爲めの方便由序と見らるゝのであります。然るに善導大師は、この一段には弘願の密意が顯はれたものだと見られたのであります。「娑婆の化主、物の爲めの故に想を西方に住めしめ、安樂の慈尊、情を知り給ふが故に則ち東域に影臨したまふ。これ乃ち二尊の許應異なることなし、直に以て隱顯殊なることあり、正しく器朴の類萬差なるに由りて、互に郢匠たらしむることを致す」と述べられてあります。これは釋尊が韋提希夫人に對して「苦惱を除くの法を説くべし」と仰せられながら之を説かざるに、その聲に應じて阿彌陀如來が空中に顯現せられたのは、衆生の機類が萬差であつて、利根あり鈍根あり善人あり惡人がありますから、利根なものは、釋尊が説かるゝ定善觀を修して其利益を得らるゝも、末代不善の機類には、其定善が相應せないから苦惱を除く法を説かせられなかつたのであります。然るに阿彌陀如來がその聲に應じて來現せられたのは、定善を修することの出來ない、濁惡不善の機を刺さず攝取す

る弘願を顯はさんが爲めでありまして、釋尊が説くべしと云ひながら説かれないのも、彌陀が空中に顯現せられたのも、二尊の隱顯の方便を以て、逆惡の機に相應する弘願を顯はす爲めであります。すれば彌陀弘願の外に釋尊の意がありませんから、二尊一教と名づけられるのであります。それで苦惱を除く法は、表から見れば要門の觀法ではあるが、其中を窺へば弘願であります。それで此の一段の文を又七科に小區分して、弘願に取りきりて釋せられてあります。因に申します。この韋提希夫人の前に顯現した彌陀は、立撮即行と申して足を擧げて苦の衆生を救ふすがたであります。これが我が淨土眞宗に於ける本尊阿彌陀如來の御姿であります。次に第八節の處に觀の方便として、委しく懺悔の方が説明されてあります。

第八の像觀は、十三節に分ちて佛身を觀する豫備として、像觀の觀法が明かされてあります。經文に「是の故に汝等佛を想する時、是の心即ち是れ三十二相八十隨形好なり、是の心作佛す是の心是れ佛なり、諸佛正徧知海は心想より生ず」と云ふ御言

葉を、やゝもすれば自性唯心の觀とするものがありますから、善導大師は極力これを排斥して「或は行者ありて、この一門の義を將て唯識法身の觀となし、或は自性清淨佛性の觀となすものは其意甚だ錯れり。絶えて少分も相似たることなきなり。既に像を想へと言ひて三十二相を假立せる者なれば、眞如法界の身、豈に相ありて縁すべく身ありて取るべけむや。然るに法身は色なくして眼對を絶す、更に類として方ぶべきなし、故に虚空を取りて以て法身の體に喩ふるなり。又今この總門は、等しく唯方を指し相を立て心を住めて境を取らしむ、總て無相離念を明さるるなり。如來懸に末代罪濁の凡夫を知しめて相を立て、心を住めしむるに尙ほ得ること能はず、何況んや相を離れて事を求むる者は術通なきの人、空に居して舍を立つるが如きなり」と申されてあります。因に申しますが『般舟讚』にも、この諸師の錯解に對し地獄の苦相を示して、いたく排斥されてあります。要するに大師の觀法は理觀にあらずして事觀であります。極樂はありと思へばあり、なしと思へばないと云ふ

が如き想像の世界ではなくして、眞實の世界であります。無漏法性の世界であります。無爲涅槃の世界であります。大師の體驗の上に西方の淨土を觀見せられたのであります。その觀像の法は、第六節の處に順觀逆觀として明され、次に「十三觀の中に、この寶池、寶華、金像等の觀最も要なり、若し人に教へんと欲せば、即ち此の法を教へよ、但この一法成する者は、餘觀即ち自然に了す」と申されてあります。

第九の眞身觀は、十二節に分ちて淨土の眞佛を觀する觀法が示されてあります。從來の諸師は彌陀を以て應身佛としたのであります。善導大師は「玄義分」和會經論門にも、極樂淨土は報土であつて化土でないと明されました。今も彌陀の眞身は應身にあらずして報身なりとの意味で眞身と申されたのであります。

因に述べますが、親鸞聖人は「教行信證」の化土卷の初に「化身土を顯はさば、佛は『無量壽佛觀經』の説の如し、眞身觀の佛是れなり。土は『觀經』の淨土是れなり」と明し、この眞身觀の佛を以て化身と判せられました。これは善導大師が報身と定

められたに反對せられたのではなくて、その報身報土中に、また眞假を分られたのであります。それで『眞佛土卷』の最後に「眞假皆是れ大悲の願海に酬報せり」と述べてあります。この意は眞身も假身も大悲願海の酬報身であるとの意であつて、報身中に眞假と分つのであります。親鸞聖人が、かく眞身觀の佛を化身とせられた意味は『觀經』は第十九の方便の願の開説であるから、其眞身といへども、みな觀佛の行者が所觀の境界であつて、なほ六十萬億と云ふ分量があります。弘願念佛の行者の光明壽命の誓願に報うて顯れた盡十方無碍光如來を拜み上るに比ぶれば、尙方便化身であるとの意味であります。經の顯説によれば定善の機の所見の佛でありますから、分量があつて方便化身ではありませんが、若し經の隱彰の義に約し、弘願念佛の機からながむれば、數量に即して無數量の盡十方無碍光如來となるのであります。それは次下の第五節の佛身より放つ「光明が徧く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取し捨てたまはず」と、光明の利益が弘願の勝益を以て述べられてあるからで

あります。定善の行者が六十萬億の佛身を觀じて、觀が成就し佛身をみれば佛の光明は觀念の行者を照さずして、念佛の行者を攝取されて居ります。そこで觀念の行者も觀佛三昧を捨て、念佛三昧に歸する相であります。定善觀の自力のたゞ中に他力弘願の念佛衆生攝取不捨の利益を説かれたと見られた親鸞聖人は、善導大師の骨髄を得たものであります。併しこれは聖人の臆説にあらずして、大師に其意があり。故に次下に三緣釋を出され「問て曰く。佛光普く照すに唯念佛の者のみを攝取するとは何の意あるや。答へて曰く。これに三義あり。一には親縁を明す。衆生行を起して口常に佛を稱すれば、即ち之を聞きたまひ、身常に佛を禮敬すれば、佛即ち之を見たまひ、心常に佛を念すれば、佛即ち之を知ろしめしたまふ。衆生、佛を憶念すれば佛亦衆生を憶念したまふ。彼此の三業相捨離せず故に親縁と名づくるなり。二には近縁を明す。衆生佛を見たてまつらんと願すれば、佛即ち念に應じて目前に現在したまふ、故に近縁と名づくるなり。三には増上縁を明す。衆生稱念すれば即ち多劫の

罪を除く。命終らんと欲する時、佛と聖衆と自ら來りて迎接したまふ。諸邪業繫能く尋ふるものなし、故に増上縁と名づくるなり。自餘の衆行は是れ善と名づくとも、若し念佛に比ぶれば全く比較にあらざるなり。この故に諸經の中に處々に、廣く念佛の機能を讚へたり。『無量壽經』の四十八願の中の如き、唯彌陀の名號を專念して生を得と明す。又『彌陀經』の中の如し。一日七日、彌陀の名號を專念して生を得と。又十方恒沙の諸佛の證誠虚しからざるなり。又此の經の定散の文の中に、唯名號を專念して生を得と標す、この例一にあらざるなり。廣く念佛三昧を顯し竟んぬ」と仰せられてあります。大に翫味すべき文字であります。

第十の觀音觀は、十五節に分ちて釋されて、最後に「觀音願重くして十方に影現し、寶手輝きを停めて機に隨うて引接し給ふ」と讚せられてあります。

第十一の勢至觀は、十三節に分ちて釋せられ、最後に「勢至は威高くして坐するに他國を搖かし、能く分身をして雲集し、法を演べて生を利し永く胞胎を絶ち常に

法界に遊ばしむ」と讚せられてあります。

第十二の普觀は、六節に分ちて自身が淨土に往生するの相、往生し終りて佛菩薩を見奉り、又水鳥樹林等を見奉り、又依報正報の說法の音聲を聞くことを觀想するのであります。最後に「衆生念を注めて西方の依正二嚴を見んと願すれば、了々として常に眼に見るが如し」と讚せられてあります。

第十三の雜想觀は、十一節に分ちて、上來上根上智の人の爲に大佛身、大菩薩身を説いたけれども、鈍根下智のものは、これを觀することが出来ないから、大身をすて、小佛小菩薩を觀せしめ、かねて行人の意樂に隨うて大身なりとも小身なりとも、自由に觀せしむるから之を雜想觀と名づけたので、淨影・天台は佛菩薩觀と云ひ、嘉祥は雜觀と名づけられて居ります。

以上の十三觀を總じて「初に日觀を教へ昏闇を除き、水を想して氷となして内心を淨む。地下の金幢相映發し、地上の莊嚴億萬重、寶雲寶蓋、空に臨んで轉じ、人



天の音樂互に相尋げり。寶樹瓔を垂れて雜菓を間へ、池は徳水を流して華中に注ぐ。寶樓寶閣皆相接し、光々相照して等しく蔭なし。三華(佛と二菩薩の華座)獨り迴にして衆座に超え、四幢縵を承けて網珠羅る。稟識心迷うて由未だ曉らず。心を住めて像を觀じ靜に彼に坐せしむ。一念心開いて眞佛を見れば、身光相好轉彌多し。救苦の觀音・法界を緣じ、時として變じて娑婆に入らざるなし。勢志の威光能く震動し、縁に隨うて照攝して彌陀に會せしむ。歸去來、極樂身を安ずる實に是れ精なり。正念に西歸して華含むと想へ、佛の莊嚴を見、說法の聲、復、衆生あり心に惑を帯ぶれば、眞實の境を緣ずとも恐らくは成じ難からん。如來をして漸觀を開かしむることを致す。華池に丈六等の金形ありて、變現の靈儀大小ありと雖も、物の時宜に應じて有情を度す。普く勸む同生の知識等、專心に念佛して西に向うて傾け」と讚せられてあります。

散善義

『散善義』は『觀經』の正宗分中、散善を明かせる九品往生の一段を解釋し、併せて得益分、流通分、耆闍會の三分をも解釋したものであります。韋提希夫人の請に應じて定善十三觀を説き竟つたから、佛は自ら三福九品の散善を説いて、散亂麤動の機を攝せられたものとするのが善導大師の見方でありまして、諸師が三福を以て「教我思惟の請に應ずる散善とし、十六觀を悉く「教我正受」の請に應ずる定善とする説とは同様ではありません。初に三福と九品とは開合の差違であつて、其行體は全く同一で、世・戒・行の三善を行するものが上品上生、戒・行の二善を行するものが上品中生、世戒の二善を行するものが上品下生、行善のものが中品上生、戒善のものが中品中生、世善のものが中品下生であり、下三品には此餘の三福がないものであることを明し、次に上輩觀行善の文前に十一門を料簡し、この十一門は上々品の

初にあれども、義は中輩下輩も同様にて、隠れたると顯はれたるとの差別はあれども、九品何れにも通ずる旨を明してあります。

次に上品上生は十二節に分ちて釋せられてありますが、その第四節の「三心を辨定して以て正因とすることを明す」と題する一節は、大師が最も心血を濺いで註釋せられた個所で、凡そ十紙に亙りて淨土門の安心起行を巨細に説明せられてあります。經文に「若し衆生ありて、彼の國に生せんと願すれば、三種の心を發して即便往生す。何等をか三となす。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心。三心を具する者は必ず彼の國に生ず」と示された淨土往生の正因たる三心の説明をする最も大切な所であります。

これに就て親鸞聖人は、善導大師の精髓に徹して、この『觀經』の三心は、顯說に就けば、要門自力の三心であつて、隱彰に約すれば『大經』の三信と同じく、弘願他力の三心であること云ふことを見破られたのであります。それは善導大師が至誠心を

釋するのに「至とは眞なり誠とは實なり」と註して、至誠は眞實なりとせられ、その眞實に自利眞實(自力)と、利他眞實(他力)の二種あることを述べられてある所からヒントを得た見解であると思はれます。それでこの至誠心に就て大師が「欲明一切衆生身口意業所修解行必須眞實心中作不得外現賢善精進之相内懷虛假」と解釋せられた文をば、他流の人は「一切衆生の身口意業に修する所の解行、必ず眞實心の中に作すべきことを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現じ、内に虛假を懷くことを得ざれ」と訓點せられて皆自力にとりなしたものを、親鸞聖人は殊更に「一切衆生の身口意業の所修の解行、必ず眞實心の中に作したまへることを須ゐんことを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現することを得ざれ、内に虛假を懷けばなり」と他力にとりなされたのであります。行者の安心起行は共に如來の眞實より廻向し給ふを須ふべし、其故は雜善を修して外相を飾ることも、内に三毒があるから雜毒の行となるとの意であります。「須」の字を他流では助字として「べき」と軽く

見るのであります。聖人は實字として「用ゐん」と訓せられたのは、如來永劫の眞實をば衆生へ施し給ふにより、この施す所を用ひて安心を得、その上に三業の行を起すべしとの意であります。この「眞實心中作」の五字を「眞實心の中に作すべきこと」と訓すれば、自力となりませんが、聖人の如く「眞實心の中になし給へる」と訓すれば、全く他力となります。法藏菩薩が永劫に大慈大悲の行を修し給ふたことが眞實で、其眞實にて出來上りたるが南無阿彌陀佛であります。之を深く信じ之を行するを、「須ふる」と云ふのであります。併しこれは聖人が勝手の解釋ではなくて、『和語燈』卷一十九の至誠釋の下にも「凡そ三業を起すには必ず眞實を須ひよ」と讀まれてあります。「須ひよ」の訓は既に元祖も用ひられたのであります。また大師が次下に、この「眞實心中作」の意味を釋して「何を以ての故に、正しく彼の阿彌陀佛因中に、菩薩の行を行じ給ふとき、乃至一念一刹那も三業の所修、皆是れ眞實心の中に作したまひしに由てなり。凡そ施し給ふ所趣求をなす、亦皆眞實なり」と仰せられ、御言

葉から願れば正にかなければならぬのであります。尤も鎮西では「凡そ施爲趣求する所亦皆眞實なるに因てなり」と訓じて、佛の自利の行も利他の行も眞實なりとの意に解するので一應は、さうも見えないではありませんが、かくては「亦」の字が解せられません。「施し給ふ所趣求をなす」とは、佛が永劫に成就せられ眞實の名號を施し給ふによりて、衆生は淨土に往生を願求するとの意でありまして、この安心に催されて佛恩報謝の起行を修することになれば、その安心起行も、みな眞實であるから、「亦皆眞實なり」と申したのであります。その源は如來の眞實より發するのであります。これを「信する心も念する心も、彌陀如來の御方便より發さしむるものなり」とも云ひ、「稱禮念すれども、自の行にあらずして如來の行を行するなり」とも申すのであります。

次に「眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり」と述べて、自利眞實(自力)に制惡と修善との二方面あることを明し、利他眞實に就て不善の三業を

ば、必ず眞實心の中に捨てたまへるを須るよ、又若し善の三業を起さば、必ず眞實心の中になし給へるを須るよ。内外明闇を簡ばず、皆眞實を須るが故に至誠心と名づく」と仰せられて至誠心の一段が竟つてゐます。「眞實心の中になし給へるを須る」と云ふことは、前に述べた通りであります。因に申しますが、この至誠心を鎮西では、全く行者の眞實心なりと見るし、西山家にては行者の眞實が如來の眞實に依るのであるとし、眞宗にては利他の眞實に約すれば如來の眞實より流れ出でたる行者の信心なれば、行者の信心が即ち眞實と云はるゝ、併し自利眞實とする時は、鎮西の如く行者の眞實心と見るのであります。

第二の深心をば「深く信するの心なり」と大師は釋されました。天台の釋では、佛果の深廣なるを求むるから又法性眞如の深理より起るから深心と云ふと高く判せらるるに對し、善導大師は愚鈍下機の信相から釋せられたものであります。そして至誠心に自利と利他の二種ある如く、これに「亦二種あり」と仰せられ「一には決定して

深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと信ず。二には決定して深く彼の阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝受し、疑ひなく慮なく、彼の願力に乗じて定んで往生を得と信ず」と、信機信法を擧げてあります。この二の深信は二とは云ふものゝ、たゞ一の信心でありまして、行者自力のはからひを捨てる方を機の深信と云ひ、他力を信ずる方を法の深信と云ふのであります。自力を捨てるは他力を信せしむるが爲めであります。彌陀本願の正所被の機は、造惡不善の無善の衆生であると知られて見れば、本願他力を信ずるより外はないのであります。

この二種深信の次に第三に決定して『觀經』の所説を信ずる。第四に決定して『阿彌陀經』の諸佛の證誠を信ずる。第五に唯、佛語を信じ決定して行に依る。第六に此の經によりて深信す。第七に又深心の深信は、決定して自心を建立せよと云ふことを明してあります。第三以下の四種は法の深信に攝まるのであります。

それから就人立信就行立信と云ふことが明されてあります。就人立信とは阿彌陀佛・釋迦佛・十方諸佛に就て信を立てることであり、この信は「一切の別解・別行・異學・異見・異執の爲めに、退失傾動せられざるなり」とあつて、凡夫の疑難、地前二乗の疑難、地上の疑難、報佛化佛の疑難にも動亂せられずして、十方諸佛が證誠する釋迦所説の彌陀の名號を専念すれば、定んで往生を得ることが疑ひないと信ずるのであります。また就行立信と云ふのは、往生の行に就て信を立てると云ふことで往生の行には正行・雜行があります。正行とは一心に専ら淨土の三經等を讀誦し、淨土の二報莊嚴を觀察し、阿彌陀佛を禮拜し、阿彌陀佛の名號を稱し、阿彌陀佛を讚嘆し供養することです。「一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるものは是を正定の業と名づく、彼の佛願に順ずるが故に」とありて、その中第四の名號を稱念することが正業で前三後一は助業で、この以外のものは凡て雜行であると明され、正助二行は「心常に親近し憶念し斷へざれば無間

とするも、若し雜行を行すれば心常に間斷する」と明されてあります。因に申しませんが、我が法然上人は、黒谷の藏にて、この「一心専念」の文に逢着して、初めて淨土宗を開く決意をせられたと云ふことであります。一心とは「大經」本願の三信即一の信樂、成就の文では聞其名號の一念、「觀經」では利他の深信で、専念以下は乃至十念の稱名であります。一心専念の言葉は、龍樹菩薩の『易行品』に「念我稱名」と云ひ、天親菩薩の『淨土論』の作願門に「一心に専ら念じて畢竟して安樂國に往生せん」と作願すと云ふ語を承けられたもので、この一心は前に「世尊我一心」と宣ふた自督安心の一心と同じことでもあります。また専念とは、讚嘆門に「口業を以て讚嘆し、彼の如來の名を稱す」とある言葉に相當いたします。

第三に廻向發願心と云ふのは、これに往相と還相との二があり、往相にも自利の廻向と利他の廻向があります。「觀經」の顯説は、修する所の定散の善を淨土に廻向して往生せんと發願する意であります。それで善導大師は、その顯説の自利廻向

の側を「廻向發願心と言ふは、過去及以今生の身口意業に修する所の世出世の善根と、及び他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世出世の善根を隨喜せると、この自他の所修の善根を以て悉く皆眞實の深信の心の中に廻向して彼の國に生せんと願す、故に廻向發願心と名づくるなり」と仰せられてあります。そして次下に「觀經」の隱彰の義に約した釋をせられて「又廻向發願して願生するものは、必ず決定眞實心中に廻向し給へる願を須ひて得生の想をなす等」と利他廻向の相を明されてあります。因に申しますが他流では、この「必須決定眞實心中廻向願作得生想」の文字を「必ず須く決定眞實心中に廻向し願じ得生の想をなすべし」と訓じ、行者の機に約してかくの如くすべしと申しますから大師の眞精神が顯はれません。然るに親鸞聖人は法に約して「眞實心の中に廻向し給へる願を須ひ」と云ひ、如來が因位の永劫に於て、三業を眞實にして積み給ひたる功德を名號に收めて、之を衆生に施して我國に生せしめんと、發願せられたと云ふ意味を明かにして、大師の眞髓に徹して點發せられ

たのであります、それで「須」の字を、「もちろ」と讀み、彌陀如來より施し給ふ名號を「信ずる」と云ふ意にとられたのであります。次に機に約したのが「作得生想」の文字であつて、名號を信すれば臨終を待たず、淨土の往生が定まると即得往生の想をなす行者の廻向發願でありまして、本願の欲生心と同じことでもあります。利他の廻向の中で法に約すると機に約すると二義あります。法に約することは親鸞聖人の獨特の解釋で他流では夢にも知らぬことでもあります。

次にこの得生の想をなす廻向心を譬を以て「此の心深く信すること金剛の若くならによつて、一切の異見・異學・別解・別行の人等の爲に動亂破壊せられず」と、堅固の相が明されてあります。これは經の隱彰の義に約した利他の廻向でありますから三心即一の信心で、廻向心に深心を會合して譬を金剛にとりて顯はされたものであります。如來より廻向し給ふ至誠深心を以て淨土に往生せんと欲する決定往生の心であつて、凡夫の妄心の上に築き上げたものでありません。それで其堅固なること

が金剛の如くであります。それから次に問答を設け更に有名なる二河譬を示して、その金剛堅固の信心は、異見・異學・別解・別行の群賊惡獸の爲に動亂破壊せられざることを示し、最後に「一切の行者、行住坐臥に、三業の所修、晝夜時節を問ふことなく、常に此の解をなし、常に此の想をなすが故に、廻向發願心と名づく」と結ばれてあります。

次に還相廻向を示されて「又廻向と言ふは、彼の國に生じ已りて還つて、大悲を起して生死に廻入して衆生を教化する亦廻向と名づくるなり」と示され、「更に三心既に具すれば行として成せざるなし、願行既に成じて若し生ぜずは、この處あることなし」と結ばれてあります。

以上は大師が一經の肝要たる三心を廣く釋されたもの、これから序分に標した三福の行法を廣く説くので「また三種の衆生ありて當に往生を得べし」と上品上生の機を示す等のことがあつて、上品上品の一節が竟つてあります。

上品中生、上品下生は共に八節に分ちて釋し、この三品の上輩に「上輩は上行上根の人、淨土に生せんことを求めて貪瞋を斷ず。行の差別に就て三品を分ち、五門相續して三因を助く。一日七日専ら精進なれば、畢命に臺に乗じて六塵を出づ。慶しいかな逢ひ難くして今遇ふことを得たり。永く無爲法性身を證せん」と讚せられてあります。

次に中輩觀の行善の文前に就て十一門の料簡があり、中品上品は、八節に分ち、中品中生、中品下生は七節に分ちて釋せられ、後に「中輩は中行中根の人なり。一日齋戒して金蓮に處す。父母に孝養して廻向せしめ、爲に西方快樂の因なり」と説く。佛聲聞衆と與に來りて取る、直に彌陀華座の邊に到る。百寶の華に籠りて七日を經、三品の蓮開いて小眞を證す」と讚せられてあります。

次に下輩觀の善惡二行の文前に就て十一門の料簡があり、下上品は九節に分ちて釋し、その第四節第五節に轉教口稱と云ふことがあります。それは經文に善知識

が、十二部經の首題の名字を讚するを聞いて千劫の罪を除こほりたに、佛名を稱するにより五十億劫の罪が除こほり化佛が來現することが説かれてあります。それを大師は聞經は心が亂るれども、稱名は心を住めるから、また聞經は佛の本願ではないが、稱名は佛の本願であるから、聲に應じて化現し給ふたと云ふことを明されてあります。因に申します。この念佛は經の顯說では、十九願の修諸功德の一分たる念佛であるが、隱彰に約すれば弘願の念佛であります。善導大師はこの轉教口稱を以て本願非本願、往生の速疾迂迴、滅罪の多少、化佛の讚不讚に約して、弘願念佛であると云ふ義を明かにせられました。これは諸師の曾て知らざる所であります。

下中品は七節に分ちて釋し、第四節に聞已即滅の機が往生の益を得ることを明してあります。經文に善知識が彌陀の功德を説き、罪人が其名號を聞き已りて命終し淨土に往生すると云ふのでありますが、これは名號を稱ふる力にて往生するのではなくて、聞く一念に願力の不思議にて往生せしむるとの意であります。この惡業を

轉じて善業となさしむる力が名號六字にありますから、親鸞聖人は「轉惡成善」の益と云ふことを此處から開顯せられたのであります。

下々品は七節に分ちて釋してあります。その第三節に五逆のものを攝取するに就て問答を設け、十八願には五逆と謗法のものを除いて往生が出来ないであるに、『觀經』の下々品には五逆のものも攝取するであるは、未だ造らざるの罪は抑止する爲め往生が出来ないと云ふたのであるが、已に造りし上は、何とも致方がない、衆生を流轉せしむるに忍びないから攝取するのであると云ふ旨を明し、第四節には十聲稱佛に八十億劫の罪を除却することが説いてありますが、これが遙に『玄義分』の十聲稱佛に十願十行ありて具足すると云ふことに應ずるのであります。

以上の下三品を總じて「下輩は下行下根の人なり。十惡五逆等の貪瞋と、四重と偷僧と正法を謗するとなり。未だ曾て慚愧して前の愆を悔いず。終る時苦相雲の如く集り、地獄の猛火、罪人の前にあり。忽ち往生の善知識に遇うて、急に勸めて専ら已に答へ給ふ。後に三福九品を明して名づけて散善となす、是れ佛の自説なり等」と仰せられて正宗分の解釋が竟つて居ります。

次に得益分を七節に分ちて釋されて聽衆の得益が明され、又流通分の中、王宮流通は七節に分ちて釋されて、第五節には念佛三昧の功能、超絶して實に雜善の比類でないこと云ふことを顯はすに五種の嘉號を出し、また觀音・勢至の影護等を明され、第六節付屬持名は『大經』の本願の名號が遠く法滅百歳の後にまで及ぶ如く『觀經』の念佛も遐代に流通すべきことを顯はされ「上來定散兩門の益を説くと雖も佛の本願の意に望むには衆生をして、一向に専ら彌陀佛の名を稱するにあり」と仰せられました。大師が『觀經』の精神を斯くの如く見られましたことは、實に古今楷

定の妙釋たる所以であります。そして我が親鸞聖人は、この妙釋から更に開顯して、「佛の本願の意」と申した「意」の字に坐りて、『觀經』には說相と佛意があると見られたのであります。說相とは表面に顯はれた言說、即ち顯說のことであります。また佛意とは、内面に潜んで居る精神、即ち隱彰であります。顯說は定散自力なれども、隱彰は弘願他力であると見られました親鸞聖人の隱顯の說は、善導大師の眞髓に觸れたものと云ふべきであります。

以上で王宮會が竟り、世尊は耆闍崛山に還り、阿難が大衆の爲めに、王宮會の說法を千二百五十人の比丘と、三萬二千の菩薩に向つて說かれたのが耆闍會で、これが又序・正・流通の三分があります。それが竟つて五分に約した結文があつて『觀經』一部の解釋が竟つて居ります。

最後の後序は、初に一經の大綱を王宮會と耆闍會に約して其大意を述べ、次にこの『四帖疏』は諸佛の證誠を請うて述作したもので、その奇瑞を感見した由來を記し

てあります。先づ大師自ら念ふやう、「自分は生死の凡夫にして智慧淺短である。然るに佛敎は幽微であるから、輒く從來と異なる解釋を施すべきではない。それで心を籠めて堅く願を起して、靈驗を求め三寶に歸依し奉り『觀經』の要義を出して古今の註釋家の誤謬を匡さんと欲ふのであり、三世の諸佛、釋迦・彌陀等の佛心に稱はし淨土の莊嚴相を見せ給へ」と、佛像の前にて願を立て毎日『阿彌陀經』を三遍、佛名三萬遍を唱へて發願しましたが、其夜西の空に淨土の莊嚴相が現じ、諸佛菩薩が或は坐し或は立ち或は語り或は黙し給ふと夢み、やゝ久しくして覺めました。それから毎夜一僧が現はれて『觀經』の幽玄なる義理を授けられてこの書が出来ました。出來た後に又七日を要期して毎日『阿彌陀經』十遍、念佛三萬を唱へ、淨土の莊嚴等を觀想して居られたら第一夜、第二夜、第三夜、引續いて靈夢を感じたので、最早七日をつげなかつたが、上來の靈相は、衆生をして信を取らしめん爲めでありまして自身の爲めでないから有の儘に書いて、後世のものを生じて淨土に歸せ

しめたい、この功德を以て衆生に廻向して、悉く菩提心を發し、慈の心を以て相向ひ、佛の慈ある眼をもて相見て菩提を得るまで、互に眷屬となり眞の知識となりて、淨土に生れ成佛せんと思ふ。この『四帖疏』は佛の證明を請うて定めたものでありますから、一句一字も加減してはならない。寫さんとするものは經法の如くせられたい」と述べられ、これで全く終結であります。

以上縷述した如く、この『四帖疏』は古今楷定の妙釋でありますから、法然上人は「靜かに以みれば善導の『觀經疏』は是れ西方の指南、行者の目足なり、然れば則ち西方の行人必ず、須く珍敬すべし矣」と仰せられ、親鸞聖人は「善導ひとり佛の正意を明かにせり」と仰せられました。ひとり佛の正意を明かにするとは、諸師の義に異なる所があつて、佛の正意にかなふとの意であります。その諸師に異なる點について、大谷派の皆往院鳳嶺師は『庚申記』に十異を擧げられました。第一に二序三序の異。諸師は證信序發起序と分ち、大師は證信序、化前序、發起序に分たれました。

第二三分五分の異。諸師は序正流通の三分とし、大師は序分、正宗分、得益分、流通分及び耆闍會とせられました。第三に定散配屬の異。諸師は定善十六觀、散善三福とし、大師は定善十三觀、散善は三福九品とせられました。第四に觀佛念佛の異。諸師は『觀經』は觀佛爲宗なりとし、大師は觀佛爲宗、念佛爲宗の兩宗なりとせられました。第五に一教二教の異。諸師は一尊一教を立て、釋尊が西方淨土の事を説いたとせられて居る。然るに大師は二尊二教と立て、釋迦は要門の教主、彌陀は弘願の教主なりとせられて居る。即ち『觀經』の定善十三觀は釋迦方便の教で、彌陀の本願に入らしむる爲めなりとの意であります。第六に定散致請の異。諸師は定善散善共に章提の致請によりて説かれたものとし、大師は定善は章提の致請なれども散善は佛の自ら開き給ふ所とせられました。第七に事觀理觀の異。諸師は『觀經』の觀法は事に即する理なりとし、大師は事觀とせられました。第八は報應二身の異。諸師は彌陀を應身、極樂を應化土とします。大師は報身報土とせられました。第九に九品凡

聖の異。諸師は九品の往生人を皆聖人と見ますが、大師は九品は大乗に遇ふもの、小乗に遇ふもの、悪に遇ふもの、異はあれども、共に凡夫なりとせられました。第十に自力他力の異。諸師は凡て修因感果の往生とし、大師は本願の強縁によるの往生とせられました。『玄義分』の序題門には「みな阿彌陀佛の大願業力に乗じて増上縁とせざるはなきなり」と宣ひ、『散善義』の深心釋に「彼の願力に乗じて定んで往生を得」と述べられた如きがそれであります。

二 法事讃 二卷

略して『法事讃』又『淨土法事讃』とも申しますが、具名は上巻の首題には『轉經行道願往生淨土法事讃』同尾題には『西方淨土法事讃』下巻の首尾には『安樂行道轉經願往生淨土法事讃』と申してあります。善導大師が胸の中に燃えたつ宗教的情熱と、胸の中に溢ち溢れたる法悦の念ひから『阿彌陀經』を讚嘆讀誦する、一日一夜の法事供

養の法式作法を定められたのが主たる目的であります。初に序文がありました。法事の大綱を叙し、正明段に入りて先づ入道場の軌則が略叙されてあります。其一番初之處に法事を修する意趣を明して「凡そ自の爲を欲し他の爲を欲し」と書き出されてありまして、自他を資益するが法事の目的であります。それから道場の鋪設としては、「先づ堂舎を嚴飾し尊像幡華を安置し」とあります。それが竟つて、「衆の多少を問ふことなく盡く洗浴して淨衣を着し、道場に入りて法を聽かしむ」と、行人の威儀を明され、それから、いよく法事の行事に入るのであります。召請せんと欲ふ人及び和讃の者は盡く立ち、大衆は坐せしめて、一人が先づ焼香、散華して周布一徧し、竟りて後、法に依りて聲を出して、先づ彌陀・釋迦・十方の諸佛、並に二十五菩薩を召請する讃歌によりて三佛を敬禮し、召請し終れば彌陀會が成立するのであります。

これより高座に轉經と請ふの歌を唱へ、次に廣く三寶を召請するに就て、先づ三

敬禮として常住の三寶を敬禮するのであります。次いで高座の者が「諸佛を召請する敬白文」を讀誦し、次に下座よりの讚請がありて又重ねて、高座のものが「法僧等を召請する敬白文」を讀誦し、それから下座のものと高座のものが、相互に法寶・僧寶・舍利諸聖等を讚誦する讚歌がありますが、毎讚歌の初に「願くは往生せんく」と唱へ、其終りに「衆等身心皆踊躍して、手に香華を執つて常に供養せん」と唱へることが同様で、讚嘆の数は凡て十二であります。それが竟つて高座のものが「諸の供具を請じて三寶に供養する敬白文」があり、下座がこれに和し、こゝに道場の鋪設が全く成立するのであります。

それから前行道に入ります。先づ初に行道七市の作法を略叙して、行道の衆に配華することから散華の法を示され、行道の讚歌としては、先づ彌陀・釋迦・十方如來を奉請する「三奉請」、行道の「讚偈」があります。次に立讚文を下座のものと高座のものが相互に唱へるのであります。この立讚文には道場の希遇なるを嘆じ、教主

の因行を嘆じ經法の遇ひ難きを嘆じ、樂因の誠意を明すのであります。讚歌の数は凡て五節で、これが終りて前懺悔に入ります。高座のものが「總じて六障を懺悔する文」を讀み上げるのであります。懺悔已つて阿彌陀佛を禮し奉れば下座のものも、また禮し奉ります。次に再懺悔となります。高座のものが「再び諸罪を懺悔する文」を讀み上げるのであります。その懺悔と發願とが終つて下座高座のものが、本佛を供養する結讚があります。これで上卷が竟つて居ります。

下卷は初に正しく『阿彌陀經』を讀誦する轉經部であります。これが『法事讚』の正宗分でも申す部分であります。經文は十七小段に區分せられて、高座のものが讀誦しますが、その間々に下座のものと高座のものが互に讚歌を唱へるのであります。讚歌の数は凡て三十一節あります。これが済むと後の行法分であります。先づ初に後懺悔でありまして、高座のものが大衆の爲めに總じて懺悔して殺生・偷盜・邪淫・虚誑・調戲・惡口・兩舌・意業罪（貪欲・瞋恚・愚痴）をそれづくに懺悔するのであります。

す。毎懺悔毎に下座のものが「至心に阿彌陀佛に歸命する」と和するのであります。それから如來が偏に勧め給ふ教旨と、曠劫希聞の慶心と、慚愧感謝の旨とを讃歌を以て述べるのであります。

次に後行道部に入りますが、先づ行道の作法を略叙してあります。それによれば高座のものは、一人に命じて焼香せしめた後、大衆に華を配賦せしめる。それより行道前の讃頌歌があり、行道三帛或は七帛の後、佛前に立ちて行道後の立讃がありて佛を送り奉ります。それが終りて結願部に入ります。結願作法は磬子を打つて、「敬禮常住三寶」の頌を唱へ、次に歎佛の呪願を唱へ、次に下座が七唱禮を唱へて行法は畢ります。其後面々の意に隨ふ偈を唱ふるのであります。

最後に善導大師は「行者等に白す、一切の時に常に此法に依りて以て恒式と爲す」と申されてあります。すれば『法事讃』の行法は、一時的のものにあらずして、念佛道場のあらん限りは、是れを以て末代迄の恒式にせよとの意であります。そして送

經の語が最後に記されてあります。

× × × × × × × ×

この『法事讃』の行法の傳來に就て一言致しますが、この行法は、要するに轉經と行道と懺悔と讃嘆とであります。轉經の轉は轉讀、轉詠、轉説と熟し、經卷を繰り讀むを轉讀と云ひ、これに節つけ讀むを轉詠と稱し、また經を説くことを轉説と云ふのであります。轉説は轉法輪と云ふのも同義でありまして『法事讃』卷上(丁四)に「衆等心を齊うして高座を請す。慇懃に皆敬ひて尊經(阿彌陀經のこと)を説きたまへ」と云ひ、或は同(丁五)に「大衆同心に高座を請す。群生を度せんが爲めに法輪を轉じたまへ」と云ひ、或は同(丁七)に「是の因縁を以て高座を請す、佛の慈恩を報じて法輪を轉じ給へ」と仰せられた言葉より考ふれば轉經とは、この轉法輪と同じやうに、經を讀みて讃説することゝ思はれます。經典を讀誦し解説することは我が佛教が印度以來の風習であります。

次に行道と云ふは、佛邊を旋繞すること、三布或は七布することが前後の行道法の中に出て居りますが、佛在世の時に佛弟子が常に佛を右繞三布して敬禮したものであります。

懺悔とは梵語には懺摩 (Ksama) と云ひ、過去の罪惡を悔いて、佛菩薩・師長大衆の前に發露するのでありますが、これも佛敎の通儀であつて佛在世の當時から行はれたものであります。また讃嘆も歌頌を以て、佛德を讃することが佛時代からの風習であります。佛敎が支那に來てからこの行法を盛んに行ふたは秦の道安法師であります。次に廬山の惠遠法師も、また之を承けて式時の禮法を定められました。善導大師は主として之を學ばれたものと思はれます。また天台に法華懺儀と云ふことがあります。智者大師の『法華三昧懺儀』一卷に委しく述べてあります。それによりますと、嚴淨道場法、行者淨身方法、三業供養法、請三寶法、讃嘆三寶法、禮佛方法、懺悔・六根・勸請・隨喜・廻向・發願法、行道法、誦經法、坐禪實相正觀法を

明されてあります。大師の『法事讚』にはこの第十の實相正觀法がない許りで其他は皆あります。さすれば主としてこれに據られたものと思はれます。また天台の灌頂法師の『國清百録』の如きも大に參照せられたこと、思はれます。

『法事讚』卷下の終りに「行者等に白す。一切の時に常に此法を以て恒式とせよ」とあります。『法事讚』『往生禮讚』『般舟讚』の如きは、何れも念佛道場に於ける佛事作法を明したもので、これを末代までの模範とせられたのであります。支那でも唐宋及び其以後に於ても可なり行はれたこと、存じますが、委しいことは分りません。日本に於ては法然上人以後に於て行はれたのであります。『禮讚』勤修のことは、後白河法皇崩御の後、その御菩提の爲め、建久三年秋、大和前司親盛入道 (法名見佛) が入坂の引導寺にて心阿調聲し、住蓮・安樂・見佛等助音して六時禮讚し、七日念佛したのが其初であること。また元久元年三月、後白河法皇の十三年忌に當り、法然上人が蓮華王院で淨土三部經を書寫せられ、能聲をえらびて六時禮讚を勤修した

こと。また大和入道見佛も淨土三部經如法經次第によりて、法皇の御菩提を吊ふたことが、何れも『黒谷上人傳』に出て居ります。そして其時の堂莊嚴事、前方便七箇日事、入道場次第、總禮、讚嘆等のことが出て居りますが、それによれば『法事讚』に似た所が多くあります。併し『禮讚』を修せられたり『觀經』を讀まれたと云ふやうなことがありますから、これは『法事讚』の作法とも全く同じとも申されません。『法然上人傳翼讚』卷六十に『法事讚』は筑紫の善導寺にて聖光上人行ひ給ひ、今に其軌則を傳へ侍るとかや」と云ひ、又太秦の善觀房か初めたのであると云ふことも書かれてあります。西山派では嵯峨二尊院でつとめがあると云ひ傳へます。眞宗にては親鸞聖人が歸洛後、五條西洞院あたりに遅棲し、先師聖人(法然上人)の没後中陰の追善に漏れたることを恨みとし、其聖忌を迎ふる毎に聲明の宗匠を屈請し、月々四日夜禮讚念佛を取り行はれたことが『拾遺古德傳』卷九に出て居ります。また親鸞聖人の孫にあたる宗惠(覺如上人の父)法師も平素より聲明に堪能で、臨終に淨惠と云ふ

一念の名僧(善觀房流の聲明)を請じ、『禮讚』の讀誦に臥しながら助音をしつゝ、命終せられたことが、『最須敬重繪詞』卷六に出て居ります。この宗惠法師の十三回忌は元應元年でありましたが、大谷の往跡にて『法事讚』の行法を勤修せられたことが同書に出て居ります。また『存覺一期記』によりますと、この宗惠法師の三十三回忌は、曆應二年の四月十二日でありましたが、この時も一條亭に於て『法事讚』の行法を行せられたことが記載されてあります。すれば往古は眞宗にても『法事讚』の行事があつたことが知られます。

併しながら一般の俗人には、かゝる行事は六ヶ敷いものでありますから、眞宗の門下では自然に聖人の述作せられた和讚を、稱名に併せて唱ふことゝなつたものと見えます。そして遂には『阿彌陀經』や『禮讚』を讀むことは、自力であつて、『和讚』が往生の業であると云ふやうなことを申すものも出來たと見えて、存覺上人の『破邪顯正鈔』卷中には「『阿彌陀經』ならびに『禮讚』をもては外道の教となづけて地

獄の業と稱し、わが流にもちゐる『和讃』をば往生の業なりと號するよしの事」と記して、その誤れる考へを訓誡せられ、『和讃』等の述作の眞意を明かにせられてあります。かくて蓮如上人が吉崎逗留の頃より、六首引和讃の作法を定めて、六時禮讃の作法にかへさせられ朝夕はこれを勤めることにしたのであります。併し別時法要の時には、なほ之を勤めるのであります。

三 觀念法門 一卷

『觀念法門』とは略稱で、具名は首題に『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』と云ひ、尾題には門の字の下に尙ほ經の字が加へられてあります。本書は當時教界の諸師が『觀經』をば單に觀佛を説いた經であると考へて居た見解に對して、善導大師は『觀經』は觀佛と念佛との兩面を有して居るとの考へを抱かれて居て、しかも觀佛なるものは、畢竟念佛に結歸せしむる過程であるとの信念を有せられて居ました。併し當

時の教界に對し、直に之を高唱することを控え、先づ『觀經』中心の觀佛三昧の法と、『般舟三昧經』中心の念佛三昧の法とを示し、この兩三昧には五種増上縁の功德のあることを示し、更に問答を設けて、信不信の損得を明して修行を勧められたのであります。以下少しく其要領を説示させよう。

本書は三大段に區分されて、第一章三昧行相分、第二章五縁功德分、第三章勸修分となり。其第一章の三昧行相分には、觀佛三昧法、念佛三昧法、別時念佛の入道場法及び臨終行儀の行相が明されてあります。

第一の觀佛三昧法は『觀經』を骨子とし『觀佛三昧海經』に説く所をも參照して明されてあります。其要領を云へば、其所觀の境は「阿彌陀佛の眞金色の身より圓光の徹照して端正無比なる相を觀するのであります。觀するとは心を凝らして深くわが胸に思ひ泛べみるのであります。そして此修行をするものは何時でも、どんな處に於ても、晝夜の分ちなく、行住坐臥の隔てなく、常にこの想をなし、まづ常に意を

住めて西に向ひ、彼の國の聖衆、及び一切の雜寶莊嚴等の相に至るまで、目前に對するが如くに、想ひ觀きはむるのであります。

これが觀法の要領であります。更に委しく説明に入りて、修行者が坐する時は、先づ結跏趺坐して身を端しくし、口を合せ眼を閉ぢ、開くに似て開かず、閉づるに似て閉ぢざる程度なれと行者の身儀を示し、さていよく心眼を以て佛の頂上相より、下足の千輻輪相に至る三十二相を次第に觀することが細叙されてあります。これが具足して佛の色身莊嚴功德を觀すとなして、これを順觀と名づけるのであります。更に華座・華臺・華葉・華寶池等を觀することを明し、又この觀想によりて得る所の現當の利益を明し、更に再び觀想の要義を明され最後に出定後に於ける持戒・念佛・讀誦等の事をすゝめて「行者に白さく、淨土に生せんと欲せば、唯すべからく持戒念佛し『彌陀經』を誦すべし。日別に十五遍すれば二年に一萬を得、日別に三十遍すれば一年に一萬なり。日別に一萬遍の佛を念せよ、亦すべからく時に依りて淨土

の莊嚴の事を禮讚すべし、大に須く精進すべし等」と勸められて、大師が生涯に於て如何に『阿彌陀經』を讀誦したまひ、また如何に念佛を修せられたか々窺はれます。これで觀佛三昧法の一段が終つてあります。

次に『般舟三昧經』によりて一日一夜若くは七日七夜、道場に入りて念佛三昧を修する方法が明されてあります。此中初に同經『請問品』の文を引いて總じて行名を標し、次に同經『行品』を引いて別して行法を示されてあります。總じて行名を標すと、この念佛三昧のことも釋迦如來は、十方諸佛悉在前立と名づけられました。即ち彌陀佛を念すれば即ち十方の諸佛が悉く前にありて立ちたまふとの意であります。また佛はこの三昧は定善と名づけると説かせられてあります。即ち心を靜めて修するからであります。次に別して行法を示すとは、『般舟三昧經』の行品によつてこの定意と名づくる三昧の委しい行法を明すのであります。其初に「菩薩疾く是の定を得んと欲は、常に大信を立て如法に之を行せよ、則ち得べきなり、疑相毛

髪はつの如ごときも有あることなかれ」と申まをされてあります。所謂いはゆるしん信のちじて後のち、行ぎやうせよと信しん行ぎやう次第だいしてあります。そして最後に「この定意ぎやういの法ほふを名なづけて菩薩ぼさつの超てう衆しゆ行ぎやうとなす」と申まをしてあります。超てうとは超てう勝しやうの義ぎと超てう越えつの義ぎがあります。この三昧さいまいは衆しゆ行ぎやうに超てう勝しやうし、また衆しゆ行ぎやうを超てう越えつして速すみかに妙めう果くわを成じやうずることが出来るのであります。この定ぎやうを得うれば弘願ぐわんに入いることが出来るのであります。一超てう直ぢき入にふであるから衆しゆ行ぎやうに超こゆると云いはれます。次に三言けん百六十句くの偈頌げしやうがあつて定意ぎやうい法ほふ、助道じよだう法ほふが明あかされ、最後さいごの四句くで行ぎやう徳とくを結けつ示しされてあります。それより又長行またぢやうぎやうとなつて所得しよとくの三昧さいまいの行相ぎやうさうを明あかして「持ぢ戒かいを全まく具ぐし、獨ひごり一處しよに止とまりて、西方さいぱうの阿彌陀佛あみだぶつを念ねんずること一日いちにち一夜や、若もしくは七日にち七夜やせよ」と云いひ、成相じやうさうを明あかして「七日にちを過すぎ已おりて後のちこれを見みん」と云いひ、その念ねんずるの方ほうとしては「當まさに阿彌陀佛あみだぶつの御名みなを念ねんせよ」と申まをされてあります。これは要門えうもん方便ほうべんの觀佛くわんぶつ三昧さいまいをして、遂つひに弘願ぐわん眞實しんじつなる稱名しやうみやう念ねん佛ぶつに歸きせしめられたのであります。そして最後さいごに「專念せんねんするが故ゆゑに往生わうじやうすることを得う」と述のべて、やがて念ねん佛ぶつ三

昧まいの一段だんが竟おります。

次に別時べつじ念ねん佛ぶつの入道場にうだうぢやうの作法さくぱう等とうが示しめされてあります。第一だいいちに修しゆ行ぎやうの場所ばうしよとしては、道場だうぢやうの莊嚴しやうげんを整とへ、尊像そんざうを安あん置ちし奉たてまつり、香湯かうたうを灑すいで掃はき清きよめよ。佛堂ぶつだうなくば淨じやう舍しゃを右みぎの如ごとくしつらふもよし。第二だいいちに修しゆ行ぎやうの時節じせつとしては、月つきの一日いちにちより八日かまで、或あるは八日かより十五日にちまで、或あるは十五日にちより二十三日にちまで、或あるは二十三日にちより三十日にちに至いたる、その何いづれにても、また四時じなんど何月なんがつにてもよいのであります。第三だいいちに修しゆ行ぎやうの威い儀ぎとしては、行者ぎやうじやは家業かげふの輕重きやうぢゆうを量はかりて、念ねん佛ぶつ修しゆ行ぎやうの道場だうぢやうに入り、一日いちにち乃至じつた至いた七日か間かん、淨衣じやうえを着ぎし、鞋あいまつも新淨しんじやうなるを須もちひ、一日いちにちに一度いちどの中食ちゆうじきのみとなし、それも輕かろき餅もちか麤飯そはんにて、時々ときときの野菜やさいを少すこし加くへて適當てきたうに儉素けんそ節量せつりやうすること。第四だいいちに三昧さいまいの修相しゆさうとしては、道場だうぢやう中ちゆうにて晝夜ちゆうや心を凝こらし、專ちゆうら阿彌陀佛あみだぶつを念ねんじ念ねん佛ぶつを稱せうへ、或あるは坐ざし或あるは立たつも、七日かの間あひだは眠ねむりてはなりません。また禮佛らいぶつ誦經じゆきやうするに及およびません。珠じゆ數ずも繰くらず、たゞ合掌がっしやうして念ねん佛ぶつし、佛ぶつを見みたてまつるの想おぼをなし、阿彌陀佛あみだぶつの眞金しんこん

色の身の光明徹照し、端正無比なるを想念して心眼の前に在くべきであります。かくて若し立つて居れば立つた儘一萬二萬、坐つて居れば坐つた儘にて一萬二萬の念佛を稱へることで、道場内にては頭を交へて囁き合つてはなりません。第五に懺悔の法としては、晝夜或は三時或は六時、諸佛、賢聖、天地の神祇に向つて己が一生涯に犯した、身口意の衆罪をありのまゝに發露懺悔し。懺悔し竟れば法に依りて念佛すべきであります。かくて見る所の境界をば軽々しく人に説いてはなりません。善い境界が現はるれば、それと心の中に知りおき、悪しき境界が顯はるれば懺悔すべきであります。第六に發願の法として、酒肉五辛を誓つて手に捉ず口に喫はざることを。若し此の語に違はゞ即ち身體や口に惡瘡が出来るやうにと願すること。又願をかけて『阿彌陀經』を生涯に十萬遍誦すること、日別に一萬遍の念佛を唱へること。誦經は力の多少に任せて日別に十五遍、或は二十遍、三十遍誦すること、し、淨土に生れて佛の攝受にあづかることを願すること、示されてあります。

以上は道場内に於ける別時念佛、及び平生修する所の懺悔發願の法を述べられたのであります。次に臨終の行儀と看病人の心得が、明されてあります。行者、若し病を得、又は病なくとも命終せんとする時は、上の念佛三昧の法に依りて正しく身心を整へ、面を西方に向はしめ、心を專注して阿彌陀佛を觀想し、心と口と相應して稱名絶ゆることなく、決定して往生するの想、華の臺にて聖衆來りて迎接するの想をなさしめ、その時、病人若し前の如き境界が見えたなれば、即ち看病人に向ひて話をし、これを聞けるものは、そが云ふが儘に記録すること。又病人が若しも話が出来なければ看病人の人は必ず、しばらく病人に什な境界を見るかを聞くこと。若し罪相を説かば、傍の人は爲に念佛して同じく懺悔して罪の滅ぶるやうにすること。若し罪滅することが出来れば華臺の聖衆は念に應じて現前します。されば前に準じて書き記すこと。又行者の眷屬六親等が若し來りて看病するならば、酒肉五辛を食する人をその仲間に入れてはなりません。若しそんな人があれば、病人の邊に向はし

めてはなりませぬ。若ししかせば病人は正念を失し、鬼神が交亂し病人は狂死して遂に三惡道へ墮ちる。願くは行者等、好く自ら謹慎して佛の教を奉持し、同じく見佛の因縁となることを努め修せよ」と明されてあります。これで第一章の三昧行相分が竟つております。

次に第二章五緣功德分には、阿彌陀佛を稱念して淨土に生せんと願する者は、現生に延年轉壽することが出來、九種の横さまの難に遭はぬと云ふことを『大經』『觀經』『阿彌陀經』『般舟三昧經』『十往生經』『淨度三昧經』等の説によつて證明するの、五種の増上縁と云ふことを示さるのであります。即ち淨土に願生し名號を專念することの現當の兩益を説くが、この第二章の目的であります。

五種増上縁とは、一には滅罪増上縁、二には護念得長命増上縁、三には見佛増上縁、四には攝生増上縁、五には證生増上縁であります。

第一の滅罪増上縁とは、十惡五逆等の一切の罪障悉く消滅せしめらるゝを云ひ、

これには正しく念佛にて滅罪するの證文として『觀經』の下上品、下中品、下々品の三文が引かれ、兼ねて定觀にて罪を除く證文として地觀と寶樹・寶池・寶樓觀と、華座觀と、像・眞身・觀音・勢至觀の文が引かれてあります。

第二の護念増上縁とは、或は護念得長命増上縁とも云ひ、念佛の行者を彌陀・釋迦・諸佛の内護、天龍八部等の外護のあることを明すのであります。彌陀如來の内護として『觀經』の第十二普觀、流通文、眞身觀を引證し、釋迦如來の内護として『十往生經』を、諸佛の内護として『阿彌陀經』を引證し、諸の惡鬼神をして便りを得せしめず、亦横病横死厄難のなきことを明し。天龍八部等の外護として『般舟三昧經』の行品、護持品を引證し、因に持戒の得益を『灌頂經』第三卷、持齋の得益を『淨度三昧經』によつて助顯され、其他今生日夜相續して専ら阿彌陀佛を念じ、淨土の聖衆莊嚴を稱揚禮讚し日毎に『阿彌陀經』を誦すること十五遍、二十三十遍已上の者、或は四五十百遍已上の者が願じて十萬遍に満てんとし、又彌陀淨土の依正二

報の莊嚴を稱揚禮讚し、又三昧道場に入るの外、日毎に一萬遍の念佛を生涯續けて修むれば、彌陀の加念を蒙りて罪障を除き、又諸の聖衆は常に來りて護念せられ、延年轉壽長命安樂を得ると示されてあります。

第三に見佛増上縁とは、具さには見佛三昧増上縁と云ひ、親り佛力によつて淨土の相をおがみ、また定により或は臨終に佛を見たてまつることが出来るのであります。その實例は韋提希夫人が、王宮にて悲泣して遙に佛に向つて禮せし時、釋尊は其所念を知ろしめして出現し、十方の國土を現じ給ふことが『觀經』の序分に説かれてあります。たゞ韋提が見るのみならず、未來の凡夫が心に見んと願すれば、彌陀佛の三の念願力(大誓願力・三昧定力・本功德力)によつて見ることを得ることを『般舟三昧經』『觀經』の序文、及び正宗分を引いて説かれ、次に定を修して見佛するの例として『觀經』第七華座觀、第八像觀、第九眞身觀、第十、十一、二菩薩觀を引き、臨時見佛の證として下三品を引き、更に總じて『觀經』流通文を引きて現身見佛の證とし、

終りに「至誠心・信心・願心を内因となし、又彌陀の三種の願力を藉りて以て外縁とするに、外内因縁和合するが故に見佛することを得」と結んであります。そして更に『般舟三昧經』『月燈三昧經』『文珠三昧經』を引いて、其義を助顯せられて居ります。

第四に攝生増上縁とは、衆生を攝取して往生せしむるを云ふので、正しく『大經』『觀經』『阿彌陀經』を引いて證とし、重ねて三願(十九願・二十願・三十五願)を引いてあります。其『大經』の第十八願文を引いて、「願力攝して往生を得しむ」と云ひ、又「皆彌陀佛の大願等の業力に乗じて増上縁となす」と云ふ。力強い善導大師の御言葉は、如何に大師が如來の本願力に信願したまひしかを知ることが出来るのであります。大師の信仰の歸する處此處にありと云はねばなりません。

第五に證生増上縁とは、釋迦・諸佛が凡夫の往生を保證することであり、それを解釋するに初に二問答を設けて料簡し、第一問答に『觀經』序文の文を引いて佛

滅後の凡夫、佛願力に乗じて定んで往生することを證してあります。次に證生増上縁の文證として總じて十三定観、別して寶樓觀・華座觀の文、次に『大經』十七八願成就の文、『觀經』九品の文、『阿彌陀經』六方段の文を引いてあります。それから之が結語として「又敬つて一切の往生人等に白す。若し此の語を聞けば、即ち聲に應じて悲みて涙を雨ふらし、連劫累劫にも身を粉にし骨を碎き、佛恩の由來を報謝して本心に稱ふべし、豈に敢て更に毛髮も之を憚るの心あらんや」と申されてあります。此等の御言葉から窺ひますと、佛の願力によりて攝取せられ、連劫累劫に稱念憶念することば、佛恩報謝の爲めであると云ふ大師の精神が明白に現はれて居まして、この意義を宣顯せられたが親鸞聖人の信心正因稱名報恩義であります。尙其上に「又諸の行人等に白さく、一切罪惡の凡夫すら尙ほ罪滅を蒙り得生を證攝す、何況んや聖人生を願じて去ることを得ざらんや」と申されてあります。これで善人も惡人も共に往生することが明かであります。

『觀念法門』の第二章の五種増上縁の義は竟り、これから第三章に餘論として三問答を設けて、修行を勧められた勸修分であります。第一問答は不信の罪過を明すに就て『十往生經』を引いて持經の利益と誹謗の罪報とを明されてあります。第二問答は念佛三昧を行する者の得益を明すに就て『般舟三昧經』を引いて具さに明してあります。第三問答には、念佛者が罪殃を滅除する方法に就て、第一に『觀佛三昧海經』の本行品、第二に同經の第二卷第三卷によりて懺悔の方を明され、第三に同經の密行品によりて念佛三昧の受持を勧められ、第四に『大集經』を引いて懺悔を明され、第五に『木槵經』を引いて念佛を勧められ、一々の念佛に障が除かれ、念に應じて佛が現じ給ふことを明されてあります。

之を要するに『觀念法門』一卷は、聖道法中に於ては、觀門を以て出離の要道とするから、觀門を以て誘引して遂に弘願に歸せしむる手段として記されたものであります。

四 往生禮讚偈 一卷

具さには『願往生禮讚偈』又は『勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讚偈』略して『往生禮讚』又は『禮讚』或は『六時禮讚』とも稱し、『開元釋教錄』には『禮讚儀』と云ひ、親鸞聖人は『行卷』に『善導和尚禮懺之文』と稱せられました。善導大師が、『大經』を中心とし、其他龍樹・天親等の論釋に依りて往生禮讚の讚歌を編述せられ、淨土の莊嚴を頌詠し、晝夜六時に於ける日課禮讚の作法を定むると共に、自他の淨土を願求する精神を誘發醸成せんとせられたものであります。今その内容の大略を順次に記します。

本書は三部に分れます。第一部は序分とも稱すべき前序、第二部は正宗分と稱すべき六時の禮法、第三部は五縁の勝益を擧げて結勸してあります。

第一部の序分とも稱すべき部分には、先づ略して造意を叙して大綱を示し、次に廣く問答を設けて願生の要を明してあります。その初に「一切の衆生を勸めて西方極樂世界の阿彌陀佛の國に生せんと願せしむる六時禮讚の偈」と題し、次に「つゝしんで『大經』及び龍樹・天親、此土の沙門等の所造の往生禮讚に依りて、集めて一處におき分つて六時となし、唯相續して心を係けて往益を助成せんと欲す。また願はくは、未聞を曉悟せしめて遠く遐代に沾さんのみ」と記されてあるのは造由であります。それから正宗分に明すべき六時禮讚の所依の經論と、六時とを配當して大綱を示されてあります。

次に廣く問答を設けて願生の要義を明すに就て、先づ第一に安心・起行・作業と云ふことを明し、第二に專一に佛名を稱する所以を明し、第三に專修の得と雜修の失とを示されてあります。

「今、人を勸めて往生せしめんと欲する者、未だ知らず、いかにが安心し起行し作業して定めて、彼の國土に往生せしむることを得るや」とは善導大師が、この『禮讚』

を叙するに當りて第一に意を注がれた點であります。安心・起行・作業と云ふことは阿彌陀如來の本願を憧憬する信仰と、信仰より顯はるゝ行爲と、そして、それが相續するすがたであります。淨土門に於ては最も大切なことでありますが、五部九卷の中、こゝに最も其肝要な點を委しく説明されて居るのであります。そして安心を説明するに『觀經』の至誠心・深信・廻向發願心と云ふ三心を以て示され「此の三心を具して必ず生ずることを得る」と申されてあります。三心のことば『散善義』には更に委しい説明がありますが、起行作業と云ふことは此處に始めて顯はれる文字であります。それで次に起行を説明するに『淨土論』の禮拜・讚嘆・觀察・作願・廻向門と云ふ五念門を以て示され、「五門既に具すれば定んで往生することを得」と申されてあります。又作業を説明するに、恭敬修・無餘修・無間修を長時に修すると云ふ四修を明し「四修の法を行じ用ゐて、三心五念の行を策し、速に往生することを得しむ」と示されてあります。

第二に專一に佛名を稱する所以を明すに就て、善導大師は先づ『文殊師利所說摩訶般若波羅密經』卷下の「一行三昧を引き來つて」獨り空閑に處して諸の亂意を捨て、心を一佛に係けて相貌を觀せず、専ら名字を稱ふれば即ち念の中に於て、彼の阿彌陀佛及び一切の佛を見ることを得といへり」と云はれ、それから二番の問答で、觀念を捨て稱名を勸むるは、衆生は障重く心麤にして觀が成就しがたいと云ふ所以と、一佛を念するは即ち多佛を念する所以だと云ふことを明されてあります。次に偏に西方を勸むる所以を釋されるに就て、『觀經』に西に向つて座し、西方を觀じ、西方を禮し西方を念せよなど、勸め、西方に向ふは最も勝れたとせらるゝは「樹の先より傾けるが倒るゝに、必ず曲れるに隨ふが如くである」と明し、更に問答を設けて「諸佛の所證は平等にして是れ一なれども、若し願行を以て來し收むるに因縁なきにあらず。然るに彌陀世尊もと深重の誓願を發して、光明名號を以て十方を攝化したまふ、但信心をして求念せしむれば上一形を盡し、下十聲一聲等に至るまで、佛の願

力を以て往生を得易からしむ」と申されてあります。

第三に専修の得と雑修の失とを示されて、専修の得を擧げて「念々相續して畢命を期とするものは、十即十生百即百生なり」と仰せられ、更に専修の四得を擧げ、更に雑修の失を擧げて「若し専を捨て、雑業を修せんと欲はんものは、百は時に希に一二を得、千は時に希に三五を得」と仰せられ、更に雑修の十三失を擧げられてあります。そして重ねて得失を決して「余このごろ自ら諸方の道俗を見聞するに、解と行とは同じからずして専なると雑との異あり、但意を専にして作さしむるものは十は即ち十ながら生じ、雑を修して至らざるものは千が中に一も往生するものなし」と仰せられ、更に最後に「仰ぎ願はくは一切の往生人等、善く自ら己が能を思量せよ」と私共に垂誡せられて居ります。

第二部の正宗分と稱すべき六時の禮法を明された處は六段に分れます。日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の禮讚であります。

第一の日没禮讚は、『大經』に釋尊や十方の諸佛が、阿彌陀佛の十二光の名を讚嘆なされて、往生を求願することを勧められたに依り、日没の時に當り、釋迦・諸佛・彌陀・諸菩薩を十九拜に禮讚し、更に要懺悔を明し、其他作梵・發願偈・歸三寶・日没無常偈七言四句・發願を擧げ、因に其他初夜(五言六句)中夜(七言四句)後夜(五言六句)平旦(五言四句)日中(五言八句)の無常偈が擧げられてあります。

第二の初夜禮讚は善導大師が『大經』下卷の三十行の偈及び長行中の要文をすぐり採りて二十行の偈を作り、初の四偈は自土他土の凡聖みな彌陀の願力に乗じて安樂國へ往生することを明し、次の九偈は往詣の菩薩大衆が、供佛讚嘆授記等種々の勝益を得ることを明し、後の七偈は此法は聞信し難きことを明して欣求を勧められ、更に彌陀・觀音・勢至・諸菩薩を重禮するので二十四拜となり、終に懺悔が明されてあります。

第三に中夜禮讚は、龍樹菩薩の『十二禮』により、十二拜と更に彌陀・觀音・勢至・

諸菩薩の四拜を加へて十六拜となるのであります。其後に略懺悔を示されてあります。略懺悔とは下に明す廣懺悔に對した名稱で懺悔(七言八句)勸請(七言六句)隨喜(七言六句)廻向(五言六句)發願(五言十句)の偈があります。

第四に後夜禮讚は、天親菩薩の二十四行の『願生偈』に依り、其要を取りて十六偈とし、更に彌陀・觀音・勢至・諸菩薩の四拜を加へて二十拜となるのであります。

第五に晨朝禮讚は、隋の彦琮法師の『願往生禮讚偈』の偈頌そのままを用ひ給うて、すべて二十章ある中、第十八の五言四句は、『勝鬘經』の偈で、餘の十九章は五言八句の律となつて居ります。最後に諸菩薩の禮を加へ、凡て二十一拜となつて居り、晨朝の時に禮拜するのであります。

第六に日中禮讚は、善導大師御自身の『願往生禮讚偈』で、初の一偈(七言八句)は總讚で、次の十六偈、各七言八句は『觀經』の十六觀を一一に別讚せられたもので最後の一偈(七言十六句)は淨土の依正二報を總結して願生を勧められたもので、そ

れに主伴の佛菩薩の二拜を加へ、凡て二十拜が日中の時に當りて禮するのであります。

これで六時禮讚は竟りであります。此六時にはそれ／＼無常偈があります。それを日沒禮讚の所へ集めて出されてありますから、實際の作法の時には、それ／＼に分けて諷誦するのであります。また懺悔文の如きも、要懺悔、略懺悔、廣懺悔と分れ、要懺悔は日沒禮讚に、略懺悔は中夜禮讚に出してあります。それで此次に廣懺悔を出すべきであります。それに先だち懺悔の動作内容を明されて三品あることと、如來の真心が徹到したものは、三品の懺悔と同じことであると云ふことを述べられてあります。

次に廣懺悔であります。これは十方の三寶、天龍等の非人、法界の衆生、現前の大衆を所對として懺悔するのであります。懺悔する處の罪體は、無始以來所造の殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌と云ふ身口七支の業と、五戒・八戒・十戒・十善

戒二百五十戒・五百戒・三聚戒・十無盡戒・一切の戒及び一切の威儀戒を破つたこと
 であります。その作罪は實に無限で無邊であります。これを三寶の前、法界衆生の
 前に發露懺悔するのであつて「今日より始めて願はくは、法界の衆生と共に邪を捨
 て、正に歸し、菩提心を發して慈心を以て相向ひ、佛眼をもて相見て菩提まで眷屬
 とし、眞の善知識となりて同じく阿彌陀佛國に生じ乃ち成佛に至らん」と要誓する
 のであります。

第三部の勝益を擧げて結勸する一段には、先づ見佛の益を擧げ、入觀及び睡眠の時、
 一心に合掌して面を正して西に向ひ、稱名して彌陀佛の身相光明を示現したまへと
 發願すれば、發願の時、或は睡眠の時、見ることを得る「この願比來大に現驗あり」と
 善導大師は自己の實験を語られて居ります。

それから次に問答を設けて「阿彌陀佛を稱念禮讚して、現世に何の功德利益があ
 る」と問はれ、之に答ふるに『觀經』により滅罪増上緣『十往生經』及び『觀經』により護
 念増上緣を明し、更に『大經』阿彌陀經』により攝生増上緣、又『阿彌陀經』により證
 生増上緣を擧げて、最後に「今既にこの増上の誓願います憑むべし、諸の佛子等
 何ぞ意を勵まして去かざらんや」と激勵されて居ります。
 因に『禮讚』行事の傳來等に就ては『法事讚』の下に併せて述べましたから參照して
 下さい。

五般舟讚 一卷

具さには『依觀經等明般舟三昧行道往生讚』と申しますが、善導大師が七日乃至九
 十日に亙りて、般舟三昧と稱する別事法要を修し給ふに當り『觀無量壽經』等により
 て廣く淨土の依正莊嚴の事を讚嘆し給ふた口業讚嘆の歌頌であります。併し『觀經』
 のそのまゝを歌つたものではありません。大師が自ら三昧に入りて觀見したる境界
 を捉へ、それを豊麗なる詩情に訴へて描き出されました歌頌でありますから、理路を

正した論文とは其趣が違うて、千山萬嶽の間に入りて爛漫たる花樹の間を逍遙するか、若しくは秋の野に出で、咲き亂れた七草を見るが如きの概があります。それで古來からの註家は種々様々の見方をして其科段の如きも、實に千容萬態とも云ふべきであります。併しその錯綜した辭句の間に、また一脈の理路整然たる趣があります。それでその大要を解説します。

本書は大別して前序、正讚、後序と區別されます。

前叙の前段には、總じて一部の綱要を叙べるに就て、先づ如來の善巧によりて信を起すことを明して「釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便をもて、我等が無上の信心を發起せしめ給へり」と申してあります。次に他人の法を毀り、自分の法を讚めるなど誡めるに就て「種々の方便を説いて、教門の一にあらざること、は、たゞ我等倒見の凡夫の爲めなり。若し教によりて修行せば則ち門々見佛して淨土に生ずることを得」と説き、更に他の有縁の教行を輕毀して、自の有縁の要法を

讚じてはならぬ。行者は必ず一切凡聖の境の上に、常に讚順の心を起して是非し嫌恨を生ずるなかるべし」と示され、「淨土に生せんとせば、必ず自ら勧め他を勧めて廣く淨土の依正二報の莊嚴の事を讚すべし」と、本書に明す所の要を述べられてあります。それから問答を設けて般舟三昧樂と云ふ言葉を釋して、般舟とは常行道と翻する文字で、或は七日乃至九十日、身行の無間なることであります。三昧とは定と翻する文字で、般舟の三業無間なることによつて、佛境界が現前することであり、この境界が現前するので、身心が悦ばしくなりますから樂と云ふのであると明し、これを立常見諸佛と名づるのであると示されてあります。

第二の正讚は五百六十三行、千百二十六句、三十七章の歌頌に分れてありますが、每章の初に「般舟三昧樂」と云ふ言葉を置いてあります。三十七章と申しますが、それは一應の分別であつて、必ずしも、それで一段落が終つたとも見られない處があり、また其一章の間にもちやんと段落の切れる所もあります。すれば「般舟三昧

樂」と云ふ言葉は、如何なる場合に唱へられたかと云ふに大師の御身にとりて歡喜胸に溢れた場合に唱へられたものと思はれます。それから「願往生」と云ふ言葉と「無量樂」と云ふ言葉とが、毎句交互に小聲に唱へらるゝことゝなつて居ります。併し其方法は今日では傳はりて居りませぬから、確かなことは明かではありません。

さて五百六十三行の中、初め六十二行に、釋迦彌陀二尊の大悲攝化、並に諸佛同勸の旨を明し、總じて宗要を述べられて、これが總讚と云ふべきであります。次の五百一行は『觀經』等の説相によつて、廣く淨土の依正二報の莊嚴の相を讚嘆し給ひ、これが別讚と云ふべきであります。今少しく委しく云へば、第一章二十三行、第二章十二行、第三章の前二十七行が總讚であつて、同章の第二十八行以下第三十七章の終に至るまでが別讚であります。

總讚には釋尊が種々に化益を施し給ふ相を述べて、聖道は證し難く、淨土は速に證を得るの益を擧げて『觀經』『彌陀經』等の説は即ち是れ頓教なり、菩提藏なり、一日七日専ら佛を稱すれば命斷ちて須臾に安樂に生ず」と謳はれてあります。また阿彌陀如來が因位の發願から、果上の利益までを示されてあるのが第一章であります。次に釋迦諸佛の化益を述べ給ふのが第二章であります。また教益を示して隨順し願生すべきことを勧められたのが第三章の前半の二十七行であります。この總讚を要約すれば、頓教菩提藏の旨を明されたものでありますから宗要を述べたと申すのであります。

別讚は第三章の後半、第二十八行から第三十七章の終に至るまで『觀經』の説明によりて廣く、淨土の依正二報の莊嚴の相を讚嘆せらるゝのであります。初に「専ら『彌陀』『觀經』の法を讀むべし、文々句々西方を説く」と總じて所依の經を標し、それから『觀經』の正宗分、得益分、流通分と順次に讚嘆せらるゝのであります。その正宗分に依つた中には、定善及び散善に就て讚嘆し、次に總結の文があります。定善には依報觀と正報觀であります。依報觀には通依報・別依報とがあります。通依

報とは淨土の寶地・寶樹・寶池・寶樓の如きものであり、別依報とは本佛及び脇士の華座の如きを云ふので、これはみな依報であります。この通依報を明すに百八十一行あつて、第三章の後半から第十四章の竟に及んで居ります。此間は甚だ錯綜したやうに見えますが、仔細に考ふれば先づ寶地・寶樹・寶池・寶樓と順次に讃じ、次には寶樓・寶池・寶樹・寶地と逆次に讃じ、後には寶地・寶樹を讃じてあります。たとへば林苑に入りて、ゆくゆく林苑の地形や樹木や池水や樓閣を見つゝ、また後戻りして、その裏より逆次に樓閣・池水・樹木・地形を見、また側面より地形や樹木を見つゝ、その風光を詠嘆するやうなものであります。

第三章の後半、第二十九行より三十九行に至る十一行には、寶地を讃じて得益を明往生を勧められ、又第四十行より五十九行に至る二十行には、淨土の勝相を明して寶樹の徳相を讃じ、受用の得樂を示されてあります。第六十行より七十六行に至る十七行には、寶池を讃ずるに先づ池水の樂を擧げて他の同行を憶ひ、更に往生の因行と往生後の得益とを示して教主の恩に歸して往生を勧められて、これで第三章が竟つてあります。

第四章(二十七行)第五章(十行)第六章(十二行)に互りて寶樓を讃するのであります。第四章の初に先づ淨土に生ずる因行を擧げて往生を勧め、速かに生るゝことを明して疑を誡め、次に往生の相を示して得樂を擧げてあります。次に淨土に至れば寶樓にて受樂することを述べてあります。寶樓に居して自土にて受樂し、また他方に遊歴するのであります。

第五章は、かゝる淨土に生ずる此土の因を明し、又得生の益を擧げて「彌陀、諸の佛子に告げてのたまはく、極樂は彼の三界といかん、新往の化生のもの俱に報へんと欲し、合掌悲咽して言ふこと能はず」と謳はれてあります。一節を誦するたびに、私共は大師が如何に淨土にあこがれ給ひしかを惟ふと共に、穢土と淨土のへだての如何に甚だしきを想はざるを得ないのであります。

第六章には、私共を誡められて「父母妻兒百千萬あるも、これ菩提の増上縁にあらず。念々に相纏うて惡道に入り、身を分つて報を受くれば相知らず。或は猪羊六畜の内にあり、毛を被り角を戴き何れの時にか了らん。慶に人身を得ぬれば要法を聞き、頓に他郷を捨て、本國に歸せよ。父子相見ること常の喜にあらず」と述べられ、次に淨土の勝益を示し「或は華臺に坐し、樓觀に登る」と示してあります。これで順次に四種を讚することが竟つてあります。

次に逆次に寶樓・寶池・寶樹・寶地と讚するが、第七章より第十二章に至る六十五行であります。

第七章(五行)第八章(十三行)に互りて寶樓を讚じてあります。第七章には寶樓の徳相、第八章には虚空の遊戯と長時の法樂が明されてあります。

第九章(十三行)には、寶池と寶樹の莊嚴相が明され、第十章(十二行)第十一章(十二行)第十二章(九行)に互りて寶地の莊嚴相が明されてあります。第九章の初に淨

土に入ること勸め「極樂の莊嚴の門盡く開けたり、普く願す有縁の同行者、專心にして直入すること疑を須ひざれ、一たびは彌陀安養國に到れば、元來是れ我が法王の家なり」と仰せられ、第十章には先づ地體の徳相を述べ、次に往生人の受樂を明し、更に「或は道ふ今より佛果に至るまで長劫に佛を讚じて慈恩を報せむ、彌陀の弘誓の力を蒙らずば、何れの時何れの劫にか娑婆を出でむ」と讚佛報恩を明され、第十一章には淨土の因行を修することを明し、第十二章に總じて寶地の徳相を明して、逆次に寶樓・寶池・寶樹・寶地を讚することが終つて居ります。

次に別に寶地・寶樹を讚する一段でありますが、これは第十三章(九行)に、寶地は衆寶にて莊嚴せる旨と、聖衆の快樂とを明し、第十四章(八行)には寶樹の形相を巧に形容し來り「盡く是れ彌陀願力の作なり」と申されて、通依報の一段が大團圓を告げて居るのであります。

次が別依報で、第十五章(三十四行)がこれでありました。この別依報には先づ所依

の地を標し、次に本佛・脇士の華座の勝眞を明し、次に菩薩の得益として、淨土の大會に參はり受樂窮まりなきと、他方淨土に歴史することを明してあります。

第十六章の初から二十七章の八行迄百五十二行が正報觀でその中、十六章より二十章に至る八十三行が正報の像觀であります。十六章の初には淨土にて菩薩が供養すること、彌陀如來が放光授記することが明され、次いでかゝる淨土に入るは本師釋迦の力なりとして「娑婆長劫の難を免るゝことを得ることは、特に知識釋迦の恩を蒙ればなり。種々の思量巧方便をもて選んで彌陀弘誓の門を得しめ給へり。一切の善業廻して生ずるの利あれども、専ら彌陀の號を念ずるに如かず、念々に稱名して常に懺悔せよ、人能く佛を念ずれば佛また憶したまふ。凡聖相知り境相照す、即ち是れ衆生の増上縁なり」と結ばれてあります。げにも尊き御言葉であります。

これで一段落が終り、次に「他人の語に、但心をして淨ならしめて、これ皆淨なりと信受することを得ざれ、若しこれを諸佛の國と同じと道は、何によりてか六道同じく生死せんや」と云ふ言葉が突起してあります。これは恐らくは『觀經』の第八觀に「是の心作佛す、是の心是れ佛なり」と云ふ言葉を取り損ひ、唯心の彌陀己心の淨土と觀じ、或は其心の淨きによりて則ち佛土淨しと思ふが如き異執を斥はれたものでありませう。此の世界には棘刺叢林が滿ち、無明煩惱がしげく地獄の長苦があることを明されたのであります。

第十七章(十三行)には、それに引續きて阿鼻地獄に入る苦相を示し、第十八章(七行)には、阿鼻獄七重門内の長苦の相を示し、その業因を擧げられ、第十九章(十行)には、なほ受苦の極りなきを示され、第二十章(七行)第二十一章(四行)二十章の初四行に受苦の因は、五逆謗法と殺生・偷盜・邪淫・口業過失のものであると擧げられ、後の五行に淨土を欣求することをすゝめ、「忽ちに地獄長時の苦を憶して捨て、須臾も安樂を忘れざれ、安樂佛國は無爲の地なり、畢竟して身を安んずる實に是れ精なり」と申されてあります。

第二十三章(十五行)には、淨土の主體たる阿彌陀佛の眞身觀を明すのでありますが、先づ初に所居の土徳を讚じ、次に眞身の果徳を讚するに、その身相と光明とを明され、その淨土に至るのは「念佛の一行最も尊たり」と決せられてあります。最後の一行に觀音菩薩の相好と慈悲を明されてありますが、これは次章に入るべきものと思はれます。

第二十四章(十八行)第二十五章(四行)には觀音觀であります。第二十四章には觀音菩薩の隨緣化益を讚じ、また相好と得益を讚じ、第二十五章には同生を勵まして報恩を勧められて居ります。

第二十六章(二十四行)の前十四行は勢至觀で後の十行も普觀で、何れも其觀想が明されてあります。

第二十七章(二十四行)の前八行が雜想觀で、それに觀想を明し勤修を勧められてあります。これで正報が終り、總じて定善觀が大團圓を告げたのであります。

次に散善觀であります。散善は上中下の三輩で、その三輩各三品に分つのであります。第二十七章の第九行より十五行までが上品上生、同第十六行より竟までの九行と第二十八章(六行)とが上品中生、第二十九章(九行)と第三十章(九行)とが上品下生、第三十一章(七行)が中品上生、第三十二章(八行)が中品中生、第三十三章(十二行)が中品下生、第三十四章(十六行)が下品中生、第三十五章(十行)が下品中生、第三十六章(十三行)と第三十七章(二十八行)の初め十四行が下品下生を何れも經意を頌して明かされてあります。

次に第三十七章の第十五行より十九行に至る五行が『觀經』正宗分の定善散善を結讚し、更に合讚して最後に「定善の一門は韋提の請なり、散善の一行は釋迦開き給ふ定散俱に廻へして寶國に入れ、即ち是れ如來の異の方便なり」と結してあります。異の方便なりの御言葉で、定散の二門は弘願に入らしむる要門方便であると云ふことが知れます。次に第二十行より二十五行に至る六行が得益分、二十六行より二十八

行に至る三行が流通分の意を讚せられて、それで正讚が終りであります。

第三段の後序は三節に區分せられます。第一には生死を厭ひ淨土を忻ふべきことを述べて「厭へば娑婆永く隔て、忻べば淨土常に居せり」と云はれてあります。次に機教の相を示して「今身今日に至るまで惡を斷ち貪を除くこと能はず、一切の煩惱唯增多なるを覺ふ」と仰せられ、また釋迦諸佛が同じく勸めて彌陀を專念し極樂を想觀せしめらるゝのであるから「行者等は努力々々勤めて之を行すべし、常に慚愧を懷き仰いで佛恩を謝せよ」と、首尾照應して私共を誡められて居るのであります。

五部九卷の流傳

五部九卷が支那及び日本に於て、如何に弘傳せられたかと云ふことに就て一言せんとするものでありますが、懷感禪師は大師の弟子たりしことは疑なきも、その著

『釋群疑論』を見るに、大師の四帖疏を襲踏せりと思はるゝ釋義がありません。僅に同書卷四に「善導禪師勸諸四衆專修西方淨土業者、四修摩墜三業無雜云々」と記されて『禮讚』の意を三行ほど述べて居る丈であります。それで法然上人の如きも、その師資たるの實を疑はれた位であります。また晩唐の時、道鏡・善導共集の『念佛鏡』には善導大師の『念佛集』を引くのみであります。其他後善導と稱せらるゝ法照には『五會念佛法事儀讚』二卷の著述があつて『禮讚』・『法事讚』・『般舟讚』の影響は多少受けたてであります。これは讚佛の行儀に關するもので『觀經』の深義を顯揚するものではありません。されば唐末五代の戰亂を経て『四帖疏』は業に已に散逸したものでありませう。宋の興るに及んで僅に『玄義分』のみ世に行はれたものと見えて、遵式の『西方略傳序』には「善導和尚、五會教を立て人に念佛を勸め、『觀經疏』二卷『二十四讚』『六時禮文』各一卷を造る」とあります。

それで元照の『觀經疏』には屢善導大師の説を擧げてはありますが、唯『玄義分』

の唯請定善に就て思惟三昧の事を論じたのと、十三觀を定善とし、三輩九品を散善とする『玄義分』の説を非難するに止まつて、一言も『序分義』已下には及んでは居りません。且つ「唐善導和尚、亦玄義を立て並に世に行はる」と云ふから察すれば、この時既に『定善義』以下は散逸し『玄義分』だけが残つて居つたことと思はれます。戒度の『觀經扶新論』にも「今に至るまで數百歳を経『玄義』世に行はる」とあります。また宗曉の『樂邦文類』には、善導大師の語を引くことが多いけれども『四帖疏』には及んで居りません。其後明清時代になつて大師の淨業に精練なりしことを讃嘆するものは所々にありまするが、『四帖疏』に對する評論も讃嘆もありません。それで其他力念佛の要義は後昆に残されずして、古今楷定の妙釋も其面影を止めざるに至つたものであらうと思はれます。これは『四帖疏』が早く泯滅して唯具書のみ残りしより、善導大師はたゞ行儀の人として、其淨業の精練なりしを讃嘆して、その教義の深邃なりしを知ることが出来なかつたものであらうと推察されます。

然るに幸にも日本には、この五部九卷は今日まで弘傳されて幾多の註疏まで出たこと、寔に私共の幸福と云はねばならぬのであります。その傳來に就ては從來種々の説がありますが、正倉院文書によれば、天平十四年の寫經錄（大日本古文書卷八）に「往生禮讚一卷二十九紙」とあるにより、この時既に『往生禮讚』が傳はつて居つたことが知れます。また『西方法事讚文』（善導の法事讚なるべし）一卷を、天平十五年十二月二十九日に『往生禮讚』を天平十九年十月九日に『上觀法門』（『觀念法門』なるべし）が同十二月十五日に寫されたことが、寫疏所解（大日本古文書卷二）に載せられてあります。また『觀經疏』は同十六年以後に寫されて居る（大日本古文書卷八、九）其十二月二十四日の條に「觀經正宗分四卷沙門善導七十六紙とあるの

で知れます。此時は『四帖疏』全部が寫されたのではなくて、經師等疏筆墨充帖に、更に玄序定の三卷の爲に用紙を給與した記事があるから、漸次に寫されたことが知れます。又天平二十年の經律奉請帳（大日本古文書卷二）には『依觀經等明般舟三昧往

生禮讚經』(般舟讚のこと)一卷があります。さすれば大師の著書五部九卷は、悉く天平中に傳へられたもので、また當麻曼茶羅に『四帖疏』の文意の織り込まれてゐるのから考へても、天平を去る遠からざるに既に流傳して居たことが知れる譯であります。此等の書は天平五年に玄昉法師が吉備大臣と入唐して一切經五千卷を將來した時、其中にあつたのであらうと思はれます。

その後、日本に傳來したのは、圓行の『請來錄』に『般舟讚』『法事讚』『觀念法門』が承和六年十二月十九日に請來したこと、圓仁の『入唐新求聖教目錄』に『法事讚』を請來したこと。『智證大師請來目錄』に『六時禮懺文』を請來したことが見えて居ります。そして堀河天皇の寛治八年に出來た『東域傳燈目錄』には『般舟讚』を除く他の四部の名が見えて居ります。そんな都合で何時の間にか『般舟讚』は逸失しましたので法然上人は同法者に命じて入宋して之を探らしめられました。が手に入れることが出来ませんでした。それで法然上人も『般舟讚』は御披見あらせられませんでした。聖

覺の『十六門記』には「八軸の金典」と書し「今九帖書中除般舟讚」と註されてあります。その後建保五年に御室の法金剛院で、澄空上人が圓行將來の『般舟讚』を探り得て、貞永元年に刊行し世に弘まつたのであります。

大師の此等の書が他の書疏に引用せらるゝに至つたのは、平安朝の中期以後であつて、源信僧都の『往生要集』には『玄義分』『禮讚』『觀念法門』を、永觀律師の『往生十因』には『散善義』『觀念法門』を、珍海已講の『決定往生集』には『定善義』『散善義』『禮讚』『觀念法門』が引用せられ、鎌倉時代の良遍上人も『念佛往生決心記』に『散善義』『法事讚』『禮讚』を引用されたのみならず『善導大意』一卷を撰して大師の信仰を顯彰されました。さり乍ら此等の引用は其多くは、たゞ各自の信仰に合致する點を擧げたに過ぎないのでありますが、法然上人に至りては偏依善導と標榜して、其著『選擇集』に『般舟讚』を除く外は悉く引用されてあります。引用すると云ふよりも、此等の書によつて、實にその骨格をなして居ると云うてもよいのであります。

又親鸞聖人は其著『教行信證』に『玄義分』を七文、『序分義』『定善義』を各八文、『散善義』『法事讚』各十四文、『往生禮讚』二十文、『般舟讚』十二文が引用せられ、又『愚禿鈔』の下卷は善導大師の疏に就て、種々の法門を發揮せられたものであります。また『本典』の正信念佛偈に善導大師に關する八句の偈頌があり、同じく『文類聚鈔』にも八句の偈頌があり、『入出二門偈』には二十句の偈頌が置かれてあります。殊に聖人の一隻眼を以て善導の疏文を讀破されたのでありますから、其發揮の法門も頗る多いのであります。そして『歎異鈔』には善導・法然・親鸞一徹の旨を述ぶるに至つたのであります。法然上人・親鸞聖人以後、草木が風に靡くが如く、我國には大師の信仰が蔚然として興り、その花が開け實が結んだのであります。

六 其他の著作

イ 彌陀經義

『彌陀經義』或は『彌陀義』とも申します。逸失したから卷數も内容も不明であります。『定善義』の寶樹觀を釋した下に「この義『彌陀經義』の中に已に廣く論じ竟んぬ」と云ひ、同寶池觀を釋した下に、淨土の水に入種の徳のあることを擧げて「この八徳の義は已に『彌陀義』の中にありて廣く説き竟んぬ」とありますから『觀經疏』より以前に作られたと云ふことだけは知れます。支那に於て全く傳播の史蹟がありません、日本でも成覺房が入宋して之を求めしも、得られなかつたことが行觀の『定善義私記』卷三に載せてあります。顯意の『楷定記』『定善義卷三』に「世に一卷偽造の者あり、文體義勢言ふに足らざるなり。嘗し鎮西の高麗國の貢の使に遇うて試みに問ふ、彼の國に其本ありや。彼曰く、之れあり、但し専ら淨土一乘の宗義を立して、廣く諸宗權實の論を破するを以ての故に、之を禁裏に祕して妄りに宣傳せず云々と、此れ卷説なりと雖も今釋と符合す。何となれば此の七重の義及び下の八徳の義彼の廣を指す。故に驗に知んぬ、彼の文廣く諸義を明す。彼が曰く、其の文乃ち百卷

ありと良に以あるをや」と申してありますが、一百卷の説は怪しいものであります。因にその「一卷の偽書と云ふのは、善導の『彌陀經義』が我國に傳はらざるより之に擬して作られたもので、淨土の三經其他善導の疏文等を引用してはありまするが、和人の手に成りしことは「穴賢」と云ふ語のあるにても知り得ることが出來ます。『末燈鈔』の慶信の消息中に『彌陀經義集』は、おろ／＼あきらかにおほせられ候と云へば、親鸞聖人の門下にも之を用ひられたことが知れます。それから『末燈鈔』六十五紙に引用し給へる『寶號經』の「彌陀の本願は行にあらす、善にあらすたゞ佛名をたもつなり」と云ふ言葉は、この『阿彌陀經義集』にあります。これは何れが先であつたかは不明でありまするが、寛仁二年四月に尊阿と云ふ親鸞聖人の弟子が、寫傳したことが正平の寫本に記されてありますから、それより以前のものであることは知れます。刊本には三本ありて寛文八年、吉田五郎兵衛刊行の『彌陀經義集』は撰者を「愚禿釋親鸞」とし、元祿八年大角清兵衛刊行の『彌陀經義』は「沙門善導集記」と

し、刊行の年次を記さるる丁子屋九郎右衛門の刊行の『彌陀經義集』は「沙門法然集記」としてあつて、内容は何れも同一であります。了祥の『異義集』卷二には、この書を評して「幸西又はその門下の作なるべし」と云うてあります。左もあるべきことゝ思はれます。

口念佛集

念佛の利益を明せるものと思はれます。唐末に道鏡・善道の共著となつて居る『念佛鏡』第三念佛得益門に「問うて曰く。阿彌陀佛を念じて殊勝の淨土に往生する總じて幾計の利益を得る。答へて曰く。善導闍梨集に准するに、念佛の法に總じて二十三種の利益あり。何者か是れ。一には重罪の障を滅するの益、二には光明攝受の益、三には大師護念の益、四には菩薩冥加の益、五には諸佛保護の益、六には八部防衛の益、七には功德寶聚の益、八には多聞智慧の益、九には不退菩提の益、十には大

雄に奉觀するの益、十一には聖の來迎を感ずるの益、十二には慈光照觸の益、十三には聖友同讚の益、十四には聖友同迎の益、十五には神通空に駕するの益、十六には身色殊姿の益、十七には壽命長劫の益、十八には勝處に生るゝことを得るの益、十九には面り聖衆を觀るの益、二十には常に妙法を聞くの益、二十一には無生法忍を證するの益、二十二には他方に歷事し記を受くるの益、二十三には本國に還歸し陀羅尼を得るの益、これは是れ西京善導閣梨『念佛集』中の利益なり」とあるから見れば『念佛集』なるものがあつたことが知れますが佚亡して傳はりませぬ。

ハ 大乘布薩法 一卷

この書また佚亡して傳はりません。『智證大師請來目錄』に「大乘布薩法一本善導」とありますから、傳來せられたことだけは知れて居るのであります。

ニ 二十四讚 一卷

遵式の『西方略傳』序に、「善導和尚、五會教を立て人に念佛を勧め、『觀經疏』一卷『二十四讚』六時禮文各一卷を造る」とありますから『二十四讚』と云ふものがあつたものと見える。『六時禮文』は往生禮讚のこと、思はれますが、『二十四讚』は、『禮讚』中の初夜禮讚の二十四拜を指すのであらうと云ふ説あれども、各一卷とありますから、別のやうにも思はれます。『新修往生傳』卷下にも此名が出て居ります。

ホ 一行禮文

『新修往生傳』卷下の終に「善導和尚二十四讚并一行禮文等」とあれば、こんな書があたとも思はれます、或は『往生禮讚』の一部かとも思はれます。

へ 臨終往生正念文

『淨土文』卷十二には『臨終往生正念文』、『大日本續藏經』第一輯第二編第十二套四冊の『念佛鏡』の巻尾に載するものは『臨終正念往生文』、『樂邦文類』卷四には『臨終正念訣』と云ふ題目になつて居ります。臨終の際に於ける用心を述べたもので、その書き出しに『淨土文』は「知歸子問て曰く」とし、『念佛鏡』は「知歸子善導和尚に問て曰く」とし、『樂邦文類』は「知歸子、淨業和尚に問て曰く」とし、その書き出しは異れども、その其内容は何れも同一と云つてよいのであります。四問答ありますが、臨終には心識散亂し正念を感動するを以て、身心を放下し戀着を生せざらしむるやうせよ。また看病人等が念佛して其往生を助くべきであり、醫を求め藥は服すべきも神に祈りて福を求めてはならぬ。淨土往生は家に歸るが如きものであるから、津を問ふには及ばぬと誌されてあります。『蓮門經籍錄』には「文體語氣諸を疏文に比するに頗る卑陋と覺ゆ」とあります。

ト 勸化徑路修行偈

『樂邦文類』卷五には『勸化徑路修行偈』と云ひ、京師比丘善導の撰號があります。また『淨土文』第五には、大師の傳記中に此偈を掲げ『勸化偈』と呼び、元の楚石の『西齋淨土詩』第三には『善導和尚念佛偈』とし、清の道霑の『淨土旨決』には『勸化念佛偈』と名づけて居ります。無常を念じて念佛を修すべきを教へた六言八言の偈（大師の道迹」の第三「長安の教化」二十一頁に載す）であります。明の株宏の『雲棲淨土彙語』に傳大士の作として、この偈を出されてあるのは何かの間違ひでありますせう。

此外、善導大師の著と稱せらるる『善導和尚遺誡』（一卷）は『善導和尚遺言』とも云ひ五言三十八句より成る頌文で、禁戒の重んずべきことを述べたものであります。延

寶五年の刊行で、京兆の桑門觀心の序には、和州大御輪寺の藏中より此書を得たことを記してあります。偈は和習を帯びたもので『長西録』並びに『真宗教典誌』に偽妄部に入れてあるのは尤もなことでありませう。また『善導大師長安瀧中所唱文』一首は、聖閑の『傳通記糅鈔』卷三十七に、大師が長安の瀧壺より生れたと云ふことを唱へたに和して誰かが造つたものと思はれます。瀧壺から化生したと云ふことは支那選述の傳記には見えない處でありますから、其妄誕であることは云ふ迄もありません。又『瀧水偈』一首と稱するものもありますが、これは一休禪師の導師像賛と稱するものであります。また『善導大師傳法要偈』一首。これは五重相傳の書に載せてある。承安五年三月十四日、法然上人が夢に善導大師に謁して、此偈を感得したと云ふものであります。法然上人の諸傳には載せられてありません。その語は全く和人の所造であることは明かでありませう。此等は『真宗教典誌』の卷上に真偽の評論が出て居ります。

第三編 善導和讃

善導大師

付釋文

二十六首

一 大心海だいしんかいより化けしてこそ

善導ぜんだう和尚わしやうとおはしけれ

末代濁世まつだいぢよくせのためにとて

十方じゅうほう諸佛しよぶつに證しやうをこふ

二 世々よよに善導ぜんだういでたまひ

法照ほふせう少康せうかうとしめしつゝ

功德藏くつとくざうをひらきてぞ

諸佛しよぶつの本意ほんいとげたまふ

三 彌陀みだの名願みやうぐわんによらざれば

百千萬劫ひやくせんごふすぐれども

いつゝのさはりはられねば

女身にょじんのいかでか轉てんずべき

四 釋迦しやかは要門えうもんひらきつゝ

定散ぢやうさん諸機しよきをこしらへて

正雜しやうざ二行にぎやう方便ほうべんし

ひとへに專修せんじゆをすゝめしむ

五 助正じよしやうならべて修しゆするをば

すなはち雑修ざふしゆとなづけたり

一心しんをえざるひとなれば

佛恩ぶつおん報ほうずることろなし

六 佛號ぶつがうむねと修しゆすれども

現世げんぜをいのる行者ぎやうじやをば

これも雑修ざふしゆとなづけてぞ

千中せんちゆう無む一いつときらはるゝ

七 こゝろはひとつにあらねども

雑行ざふきやう雑修ざふしゆこれにたり

浄土じやうどの行ぎやうにあらぬをば

ひとへに雑行ざふきやうとなづけたり

八 善導ぜんだう大師だいし證しやうをこひ

定散ぢやうさん二心にしんをひるがへし

貪瞋こんじん二河にがの譬喻ひゆをとき

弘願ぐわんの信心しんく守護しゆごせしむ

九 經道きやうだう滅盡めつじんときいたり

如來にょらい出世しゆつせの本意ほんいなる

弘願ぐわん眞宗しんしゆうにあひぬれば

凡夫ほんぶねん念ねんじてさとるなり

二 佛法ぶつぽう力の不思議ふしぎには

諸邪業しよじやごふけ繫けいさはらねば

彌陀みだの本ほん弘誓願ぐわんを

増上緣ぞうじやうえんとなづけたり

二 願力ぐわんりき成就じやうじゆの報土ほうどには

自力じりきの心行しんぎやういたらねば

大小だいせう聖人しやうにんみなながら

如來にょらいの弘誓ぐわんに乗じやうずなり

三 煩惱ぼんノウ具足ぐそくと信知しんちして

本願ほんぐわん力りきに乗じやうずれば

すなはち穢身ゑしんすてはてゝ

法性ほふしやう常樂證じやうらくしやうぜしむ

三 釋迦しやくか彌陀みだは慈悲じひの父母ふも

種々しゆくくに善巧ぜんぎやう方便ほうべんし

われらが無上むじやうの信心しんくを

發起ほつきせしめたまひけり

四 眞心しんしん徹到てつたうするひとは

金剛こんがう心しんなりければ

三品ほんの懺悔さんげするひとゝ

ひとしと宗師しゆうしはのたまへり